

メディア情報リテラシー研究

The Journal of Media and Information Literacy

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ (第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

第3巻第2号

- 第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラムについて 村上郷子
- 異文化間対話とデジタル・シティズンシップのためのメディア情報リテラシー 坂本 旬
- 비판적 유튜브 읽기 김현주, 박한나, 이지현, 유경혜
- デジタル・シティズンシップ教育としての YouTube の批判的読解
キム・ヒョンジュ、パク・ハンナ、イ・ジヒョン、ユ・ギョンヘ
- 케어의 대상에서 케어의 주체로 송현기
- ケアの対象からケアの主体へ ソン・ヒョンギ
- 청소년 주도 온라인 혐오 대항 프로젝트 자유학기제부터<혐오 STOP>캠페인까지
송선영, 김상은
- 学校の内外のヘイトに対抗する
青少年が主導するオンライン嫌悪対抗プロジェクト 自由学期制から「嫌悪STOP」キャンペーンまで
ソン・ソンヨン キム・サンウン
- スマートニュースによる新たな試み：学校現場で、クリティカル・シンキングのスキルを伸ばす 山脇岳志
- デジタル・シティズンシップのメディアリテラシー 日本の学校における学習実践 今度珠美
- 【フォーラムに参加して】
ファクトチェッカーが MIL フォーラムから学んだこと 古田大輔
- 「インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ」に参加して 登丸あすか
- 【投稿・寄稿・報告】
サードプレイスとして地方図書館が果たす新たな役割
一岐阜市立図書館、まちライブラリーの取り組みを通して― 松本恭幸

目次

<特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ>

第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラムについて	村上郷子…… 2
異文化間対話とデジタル・シティズンシップのためのメディア情報リテラシー	坂本 旬…… 5
비판적 유튜브 읽기	김현주, 박한나, 이지현, 유경혜…… 14
デジタル・シティズンシップ教育としての YouTube の批判的読解	
キム・ヒョンジュ、パク・ハンナ、イ・ジヒョン、ユ・ギョンヘ……	19
케어의 대상에서 케어의 주체로	송현기…… 30
ケアの対象からケアの主体へ	ソン・ヒョンギ…… 34
청소년 주도 온라인 혐오 대항 프로젝트 자유학기제부터<혐오 STOP>캠페인까지	송선영, 김상은…… 43
学校の内外のヘイトに対抗する	
青少年が主導するオンライン嫌悪対抗プロジェクト 自由学期制から「嫌悪STOP」キャンペーンまで	
ソン・ソンヨン、キム・サンウン……	50
스마트뉴스による新たな試み：学校現場で、クリティカル・シンキングのスキルを伸ばす	山脇岳志…… 62
디지털・シティズンシップのメディアリテラシー 日本の学校における学習実践	今度珠美…… 69
<フォーラムに参加して>	
ファクトチェッカーが MIL フォーラムから学んだこと	古田大輔…… 74
「インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ」に参加して	登丸あすか…… 77
<投稿・寄稿・報告>	
サードプレイスとして地方図書館が果たす新たな役割	
一岐阜市立図書館、まちライブラリーの取り組みを通して	松本恭幸…… 82

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、002-004

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラムについて

村上郷子

法政大学

1. はじめに

2021年10月16日(土)、第2回韓日メディア情報リテラシー(MIL)フォーラムがオンラインで開催された。本フォーラムのメインテーマは、「インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ」であった。参加者は日本だけで44名、韓国も合わせると約100名以上が参加したと思われる。

日韓MILフォーラムは、日韓のメディア情報リテラシーを推進する団体がお互いの活動の交流と協働をめざして交互に開催される。今回は主催が韓国コミュニティ・メディア財団であり、共催は法政大学図書館司書課程およびアジア太平洋メディア情報リテラシー教育センター(AMILEC)であった。

韓国コミュニティ・メディア財団は、「市民・学生向けのリテラシー教育、市民のメディア参加の活性化、障がい者のメディアに対する権利保障などメディア情報リテラシー事業を行う放送通信委員会傘下の政府機関の一つ」⁽¹⁾である。AMILEC(アジア太平洋メディア情報リテラシー教育センター)は、国連およびユネスコの理念に基づき、メディア情報リテラシー教育の普及と発展のためにアジア太平洋地域で活動する非政府組織(NGO)であり、ユネスコMILアライアンスの加盟団体でもある。

2. 基調講演・発表の概要

韓国コミュニティ・メディア財団会長チョ・ハンキュウ氏による主催者挨拶の後、法政大学キャリアデザイン学部教授の坂本旬氏による基調講演「異文化間対話とデジタル・シティズンシップのためのメディア情報リテラシー」がビデオ(韓国語字幕付)で発表された。基調講演では、日本のユネスコMILの現状、異文化間交流の実践、現在の日本のメディアリテラシー運動および政策をめぐる状況についての報告がなされた。

今回のフォーラムでは、基調講演をはじめ日韓気鋭の研究者や実践者たちの5つの発表すべてがビデオ（日本語もしくは韓国語字幕付）で上映され、休憩を挟んでラウンドテーブル（同時通訳あり）のディスカッションがおこなわれた。

発表セッションのコーディネーターは、韓国コミュニティ・メディア財団の政策研究チームマネージャー、ジャン・ヨンヒ氏であった。第1の発表「デジタル・シティズンシップ教育としてのYouTubeの批判的読解」（日本語字幕付）は、ソウル・コミュニティ・メディアセンター講師のキム・ヒョンジュ氏、パク・ハンナ氏、イ・ジヒョン氏、ユ・ギョンヘ氏の4名によるものであった。この発表は、小学生の子どもだけではなく親をも対象にした批判的ユーチューブ・リテラシー教育プログラムの実践研究という特徴がある。

第2の発表は、光州コミュニティ・メディアセンター講師のソン・ヒョンギ氏による「ケアの対象からケアの主体へ」（日本語字幕付）であった。この発表は、60代、70代が主軸のメディア・ボランティアの高齢者による高齢者を対象にした、高齢者のための教育・記録・企画ボランティアの実践報告である。

第3は、光州コミュニティ・メディアセンター講師のソン・ソンヨン氏、キム・サンウン氏による発表で、タイトルは「学校の内外のヘイトに対抗する」（日本語字幕付）であった。嫌悪感情や嫌悪表現に対抗するための2つのプロジェクトの実践が報告された。

第4は、日本のスマートニュースメディア研究所・研究主幹の山脇岳志氏による発表「スマートニュースによる新たな試み：学校現場でクリティカルシンキングのスキルを伸ばす」（韓国語字幕付）であった。授業実践例、オンラインゲーム教材、出前授業、書籍など、スマートニュースメディア研究所のさまざまな取組みの事例報告がなされた。

最後は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員の今度珠美氏による「日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の実践と課題」（韓国語字幕付）の発表であった。発表では、米国のコモンセンスエデュケーションを土台とした日本の学校におけるデジタル・シティズンシップの教育実践について報告された。

3. ラウンドテーブルの概要

ラウンドテーブル（同時通訳）では、コーディネーターがチェ・スクジン氏（韓国コミュニティ・メディア財団）であり、討論者は韓国からイ・ドンフー氏（仁川（インチョン）大学校）、カン・ジンスク氏（中央（チュンアン）大学校）、キム・スア氏（ソウル国立大学校）の3名、日本からは古田大輔氏（ジャーナリスト/メディコラボ代表）、登丸あすか氏（文京学院大学）の2名が登壇した。ここでは、5人の登壇者によって、先の基調講演や発表についての質疑応答をはじめ、高齢者や子どもたちのメディア参加における課題は何か、「批判的」をどのように論じるべきか、クリティカルシンキング軽視の現状を踏まえ、それをどのように教育・普及していくべきか、なぜ人はフェイクニュースや陰謀論を信じるのか、など多岐にわたる論点についての討論がなされた。議論は白熱を帯び、予定時間を超過しながらも日韓フォーラムは盛況のうちに

幕を閉じた。

- (1) シン・テソプ、[2020年9月6日に開催されたSDGsとMILフォーラムへのご挨拶]より抜粋。 http://amilec.org/?action=common_download_main&upload_id=164 (2022年2月27日最終閲覧)

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、005-013

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

異文化間対話とデジタル・シティズンシップのための メディア情報リテラシー

坂本 旬

法政大学

今回、私がお話しすることは3つあります。一つは、日本のユネスコのメディア情報リテラシー、すなわち MIL についてお話しします。二つ目は、私が特に関わっている異文化間交流の実践についてお話をします。これは韓国側からの要望でした。そして最後に現在の日本のメディアリテラシー運動や政策をめぐる状況をお話しします。

最初に個人的なことからお話しします。20年前の2001年、ニューヨークのワールドトレードセンタービルに2機の飛行機が突入する911テロが起きました。僕は2002年の4月からニューヨーク市立大学に在外研究者として滞在することになっていました。つまり、テロ直後のニューヨーク市を知ることができたわけです。

写真1は2001年3月に撮影したのですが、ワールドトレードセンターが真ん中に写っています。まさか半年後にあんなことが起こるとは思いもよりませんでした。写真2は4月10日にワールドトレードセンター跡地で撮影したものです。当時はグラウンドゼロと呼ばれていました。



写真1 2001年3月18日 自由の女神

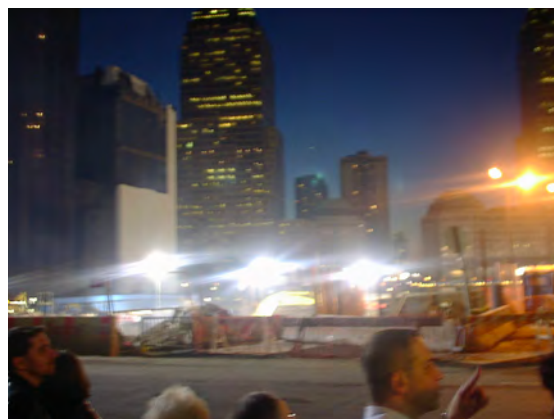


写真2 2002年4月10日 グラウンドゼロ

私は学校図書館と情報リテラシーを研究していました。ニューヨーク市内の学校図書館のライブラリアンにインタビューをしました。質問の一つがメディアリテラシーについてでした。当時

のアメリカのテレビ局はすべて戦争を推進する報道をしていました。まるでフットボールの試合のように戦争を報道するのです。アメリカ国内でもイスラム系住民が殺される事件も起こっていました。メディアが戦争に加担することの恐ろしさを感じていました。戦争をしている状況でもアメリカではメディアリテラシーを教えるのだろうか。知りたいと思ったのです。ライブライアンは答えることができずに泣いてしまいました。そして彼女は言いました。私たちの学校の子どもの親の中には、戦争に行っている人もいる、911のテロで亡くなった人もいる、私に何ができるでしょうと。この話を聞いて私は本当にショックを受けました。私はアメリカのメディアリテラシー同盟、つまり今のNAMLEの前身であるAMLAの会議をインターネットで調べました。ちょうどサンフランシスコで会議があったのです。その会議には参加できませんでしたが、戦争を扱った発表がありました。その発表をしたのはニューヨーク州イサカにあるプロジェクト・ルックシャープという団体でした。いつか発表をした人たちに会いに行きたいと思いました。

こうして私は次第にメディアリテラシーに関心を持つようになりました。2007年に初めてセントルイスで開かれたNAMLEに参加しました(写真3)。ちょうどAMLAからNAMLEに名称を変更し、メディアリテラシー教育のコア・プリンシプル(中核原理)を発表したときです。そこで、ルネ・ホップスさんにも会いましたし、ルックシャープのシンディ・シャーベイさんやクリス・スパーリィさんにも会うことができました。

さらに翌年、2008年にはイサカに行くことができました。クリスの授業では最新のコンピュータではなく、フィルムカメラとスライドを使っていました。写真4はその時の様子です。



写真3 2007年6月24日 NAMLE (セントルイス)



写真4 2008年11月7日 (レーマン・オルタナティブ・コミュニティ・スクール)

写真5は授業の様子です。ポスターと政治の関係を学習しています。コンピュータを使っているわけではなく、ディスカッション中心の授業でした。

写真6は学校評議會の様子です。学校全体の運営は生徒と教職員が話し合っていて決まっています。この様子にはとても驚きました。そしてメディアリテラシー教育の中心に民主主義があると強く感じました。写真7がシンディとクリスと私たち AMILEC のメンバーが写っている写真です。

この年にはもう一つの出会がありました。たまたまコロンビア大学のルネ・チャーロウ・オリアリィさんにコロンビア大学に招かれたのですが、そのとき国連文明の同盟のジョルディ・トレントさんと引き合わせていただいたのです。そして私たちは国連を訪問することになりました。

(写真8)。国連文明の同盟はこの2008年にユネスコとともにメディア情報リテラシープログラムを本格的に開始しました。こうして私たちはユネスコの活動に参加することになりました。



写真5 2008年11月7日 (レーマン・オルタナティブ・コミュニティ・スクール)



写真6 2008年11月7日 (レーマン・オルタナティブ・コミュニティ・スクール)



写真7 2008年11月7日 (レーマン・オルタナティブ・コミュニティ・スクール)



写真8 2008年11月5日 国連本部 (文明の同盟事務局)

2009年のNAMLEデトロイト会議ではカナダのメディアリテラシー運動を立ち上げたことで有名なバリー・ダンカンさんに会うことができました(写真9)。彼と話して、彼がヘンリー・ジルーらの批判的教育学の熱心な支持者だということがよくわかりました。僕も大学院生の頃に、ジルーらの批判的教育学の本をよく読んでいたので、彼の話が何を意味しているのかすぐに



写真9 2009年8月4日 NAMELE (デトロイト)



写真10 2007年11月1日 韓国MEDIAC T

理解できました。彼は2012年に亡くなってしまいますが、私にとっては話ができただけで本当は大きな出来事でした。そしてこのとき、ルネ・ホップスさんにもインタビューをしています。

少し時間が戻りますが、2007年には韓国でメディアリテラシーの調査をしています。KBSや高校にも行きました。もっとも興味深かったのはメディアクトでした。なぜならこのようなメディアセンターは日本にはないからです。韓国のメディアリテラシーの土台に市民の力があることを強く感じました。このときの調査は翌年出版された『メディアリテラシー教育の挑戦』（アドバンテージサーバー）の一部としてまとめられました。

そして2014年には法政大学がユネスコのメディア情報リテラシーと異文化間対話大学ネットワーク、すなわちUNITWIN MILIDに加盟しました。この写真は、2014年9月に法政大学で開催したグローバルMILウィーク・プレ東京会議の様子です（写真11）。その後、北京の清華大学で本会議が開かれました。ところで、日本のユネスコ国内委員会は文部科学省の中にあります。文科省はMILではなく、ESDを推進しています。そのため、日本のMILの普及は難しいのです。その点、韓国の国内委員会は政府から独立しているため、いろいろな活動をしています。昨年は韓国がグローバルMILウィークも主催しました。とても羨ましいと感じています。



写真11 2014年9月24日 法政大学



写真12 2019年5月6日 法政大学

私たちの活動は、一つはジャーナリスト団体との協力しながら進めている報道の自由に関する活動です。毎年5月から6月ごろに日本ジャーナリスト会議と一緒に世界報道の自由デーフォーラムを開催しています。この活動は国境なき記者団も協力しています。写真12は2019年の世界報道の自由デーフォーラムの様子です。この時のテーマは「民主主義と報道の役割」でした。もう一つはグローバルMILウィークに関連する企画です。2020年はご存知のように基礎教育保障学会と協力してSDGsとMILをテーマにしたフォーラムを開催しました。そして11月には第一回日韓MILフォーラムを開催することができました。

次に、私の実践の話を行います。私はMILの実践としては、CRAAPテストと呼ばれるチェックリストを用いた情報リテラシー教育やアメリカのセンターフォーメディアリテラシーの5キークエスションを用いたメディアメッセージの読み解きの実践、さらにスタンフォード大学歴史教育グループが開発したPCを用いる「ラテラルリーディング（横読み）」の実践などを大学だけではなく、中学校や高校でも行っています。これらは典型的なMILの実践です。

私の専門は学校図書館なので、情報リテラシーを教えるのは当然なのですが、メディアリテラシーや情報リテラシーだけではなく、ニュースリテラシーやデジタルリテラシーも教えます。し

かし、日本では、このような実践はほとんど学校では行われていないため、まずは多くの教育関係者に知ってもらうことが大事だと思っています。特に CRAAP テストとメディアリテラシーの5キー・クエスチョンはすぐに覚えられるように日本語に訳して学校で利用していただいています。ただし、CRAAP テストには限界があり、情報の真偽を確かめるためのエビデンスを自分で調べることができません。そのため、ラテラルリーディングのようなテクニックが必要になります。今年の8月にフィリピンとマレーシアの MIL の団体が主催したオンラインの教員研修がありました。私は講師の1人としてこの3つの方法を紹介しています。

日本の公立学校では、今年から GIGA スクール構想と呼ばれる計画によって、一人一台のタブレット PC を配布しています。メディアリテラシーや情報リテラシーなどの教育はますます重要になりつつあります。文部科学省の政策はなかなか変わりませんが、学校で生徒にレポートを書かせると、生徒たちはネットの情報を疑うことなく、集めてレポートに書いてしまうため、学校の教師もこのままではいけないと感じています。

最近では、デジタル・シティズンシップ教育に関心が高まっています。日本には情報モラル教育というインターネットのリスクを強調する教育が中心でしたが、1人1台の PC 時代にはそぐわなくなっていました。そのため、地方自治体や学校現場では系統的にデジタル時代の市民として必要なスキルや知識を教えるデジタル・シティズンシップ教育に関心を持たれるようになったのです。子どもたちに配布されたタブレット PC を用いたネットいじめによって、女の子が自殺するという事件も起こっています。あってはならない痛ましい事件ですが、ICT を普及させれば自動的にいい教育ができるわけではありません。デジタル・シティズンシップ教育が不可欠なのです。

今年の8月に中南米のユネスコ MIL 同盟は中南米各国の政府にデジタル・シティズンシップ教育を導入するように勧告をしました。アジアでも同様なことが必要だと考えています。また、MIL はデジタル・シティズンシップ教育に含まれるため、MIL の普及も進むのではないかと期待しています。私はこうした実践以外にも映像による異文化交流の実践も行っています。簡単に言えば、映像を用いた異文化交流です。

この実践を始めた理由は、最初にお話した911テロ事件の経験にあります。アメリカは理不尽なテロを経験して、戦争を始めました。しかしその戦争もまた理不尽なものでした。多くの無実な市民がアフガニスタンやイラクで殺されました。国連文明の同盟とユネスコが MIL を始めたのも異文化間の対話に批判的思考を含むメディアリテラシーが不可欠だと考えたからです。ユネスコ憲章の前文の冒頭には「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と書かれています。批判的思考だけでは平和は生まれません。相互理解が不可欠です。そのためにはマスメディアに頼らないメッセージの交流が必要になります。

大学レベルではデジタル・ストーリーテリングという手法で映像制作をしています。静止画と音声を組み合わせただけの簡単な方法で作ることができます。ワークショップでは、デジタル・ストーリーテリングの一つの例として、2014年に法政大学の1年生が制作した「My Story」という作品をよく用います。この作品は東日本大震災で被災した高校生が多くの知人を亡くし、な

ぜ自分が生き残ってしまったらと悩んだ一人の女子学生の物語です。彼女は、アメリカに留学し、ホストマザーになぜではなく、どう生きるかを考えなさいと言われて、ようやく自分の生き方を見つけました。この作品にはとても強いメッセージが込められています。デジタル・ストーリーテリングでは、見る人へのメッセージがとても重要です。

写真 13 はベトナムの大学で日本人学生と 2 人が一組になってデジタル・ストーリーテリングを制作している様子です。

写真 14 はカンボジアメコン大学で日本人学生とカンボジア人学生が協力し合いながら作品を作っています。現在はデジタル・ストーリーテリングではなく、ドキュメンタリー作品を協働で作る活動をしています。また、カンボジアの小学校と日本の小学校とのビデオレター交流も行っていました。

写真 15 はネパールのポカラにあるレイクシティ大学でのワークショップの様子です。ここは日本語ではなく英語で作品を作っています。残念ながら 1 年だけしかできませんでしたが、法政大学の附属高校との交流を行いました。

2020 年以降は新型コロナウイルス感染症パンデミックのため、中国、カンボジア、ネパールに行くことができませんでした。とても残念なことです。高校や大学ではデジタル・ストーリーテリングを中心に制作しますが、小学校や中学校ではデジタル・ストーリーテリングではなくビデオレターという方法を使います。これはメッセージビデオをお互いに送り合って交流するものです。2009 年ごろから始めており、iPad を使うようになって子どもたちが自分たちの力で撮影から編集までできるようになりました。交流したのは中国、カンボジア、ネパール、アメリカです。

写真 16 は中国の大連市にある公立の中等学校でビデオレター制作の授業を行ったときの様子です。埼玉県立伊奈学園総合高校の生徒とビデオレターを使った交流を行いました。この授業を



写真13 2012年9月14日 ホーチミン社会人文大学



写真14 2012年12月21日 カンボジアメコン大学



写真15 2013年8月1日 ネパール・レイクシティ大学



写真16 2014年11月3日 大連市立第16中等学校

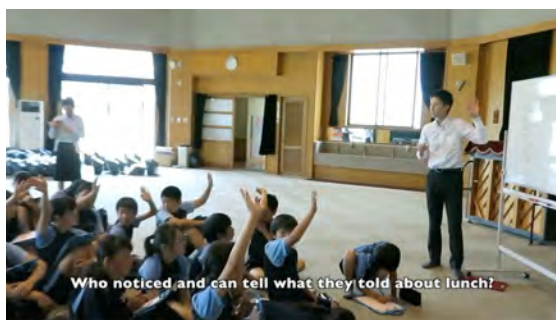


写真19 2016年6月14日 福島県須賀川市立白方小学校



写真20 2016年6月28日 福島県須賀川市立白方小学校



写真21 「届け！僕たちのエール 福島から世界へ」の一場面



写真22 ネパール・マハンカル小学校のビデオレター (2018年)

編集します。途中で何度も内容を確認し、修正をします。2016年には福島の子もたちとネパールの子もたちが交流した様子を描いたドキュメンタリー映画「届け！僕たちのエール 福島から世界へ」を制作しました(写真 21)。福島もネパールも大きな震災の被害を受けました。福島の子もたちはネパールの子もたちを励ましたいと考えてビデオレターを作りました。ネパールの小学校は山奥にあるため、インターネットも電気もありません。実際に iPad やコンピュータを持っていく必要があります。右下に QR コードを載せましたので、ぜひフルバージョンをご覧ください。

写真 22 は 2018 年にネパールの子もたちが作ったビデオレターの一場面です。一日目に日本の子もたちが作ったビデオレターを見せました。そしてその映像について教師と保護者、子どもたちが話し合いました。二日目に子どもたちは日本の子もに伝えたいことを考え、iPad を使って撮影し、編集をしました。3つの班がありましたが、そのうちの一つの班が作ったものの一部です。震災で家が壊れてしまったので、その様子を伝えたいと子どもたちは考えました。

このほかにも東日本大震災で津波の被害を受けた福島県いわき市立四倉小学校がインドネシアの小学校と交流をしています。日本の子もたちのビデオレターは、冒頭の Google マップの部分だけは大人が作っていますが、あとはすべて子どもたちが自分で作っています。そしてスマトラ沖地震で津波の被害を受けた経験のあるインドネシアのアチェ州の小学校と交流を行っています。アチェの子もは iPod を使って映像を撮影しました。日本の子もたちはイスラム文化に触れる機会はほとんどありません。子どもたちにとってはとても貴重な経験です。交流用の言語は、基本は英語です。しかし、お互いの挨拶



「届け！僕たちのエール 福島から世界へ」のリンク

や基本的な会話の言語も学んでいます。

今日、紹介した日本の小学校はすべてユネスコスクールと呼ばれる学校です。ESD 活動を評価されてユネスコから正式に認証されています。日本では ESD が盛んなので、このような異文化交流の実践も ESD です。こうした実践を進めるため、私は MIL と ESD の理論を統合するための論文を書いています。2016 年のユネスコの MILID Yearbook に「MIL と ESD の統合に関する理論的・実践的問題」と題した論文が掲載されています。ぜひ読んでいただければと思います。

ESD に MIL を統合することは、日本の学校に MIL を導入するための一つの方法ですが、最近では SDGs に注目が集まり、日本でも SDGs の教育が進められるようになりました。そして韓国が提唱したグローバルシティズンシップ教育もこのような異文化交流の実践と深い関わりがあります。私たちは長い間韓国の学校との交流を望んでいました。何度か試みたのですが、言葉の問題や学校制度などの問題でうまくいきませんでした。今日は韓国と日本の異文化交流のための第一歩となることを期待しています。

最後に、日本のメディアリテラシー運動の状況を簡単に説明いたします。日本のメディアリテラシー研究と運動は大きく分けると教育工学の潮流と欧米のメディアリテラシー理論の影響を受けた潮流の二つがあります。昨年報告をした FCT メディア・リテラシー研究所やユネスコの MIL は欧米の理論の影響を強く受けています。さらに 2016 年のアメリカの大統領選以降、フェイクニュースが大きな社会問題となり、再びメディアリテラシーに注目が集まるようになりました。テレビや新聞などのマスメディアもこの問題を大きく取り上げるようになりました。ファクトチェック団体も設立されました。韓国ではさまざまな議論がされているようですが、日本ではこの問題に対応する教育についてはまだ十分な議論がされていません。今は少しずつ提案がされている段階です。

総務省の有識者会議が 2020 年にレポートを出しましたが、そのレポートには ICT リテラシーと書かれています。文部科学省の主権者教育推進会議は今年の 3 月にレポートを出しました。そこにはメディアリテラシーが必要だと書かれています。メディアリテラシーや情報リテラシー、ニュースリテラシー、デジタルリテラシー、ICT リテラシーなどいろいろなリテラシーがありますが、残念ながら日本ではそれらのリテラシーの違いがよく理解されていません。それにも関わらず、偽情報や誤情報、陰謀論、プロパガンダの勢いは止まらず、これらを放置していると、民主主義は崩壊し、独裁的な政治が台頭することになるでしょう。こうした状況を食い止めるためには、批判的思考をもち、自立した市民の存在が欠かせません。そしてさらに今日紹介したような異文化間対話や交流のための教育が必要です。それこそユネスコがめざしている道です。昨年シン・テソプ教授の講演は、韓国の MIL が独裁とのたたかいを経て発展してきたものであることを私たちに教えてくれました。MIL における韓日の交流が今後ますます進むことを期待いたします。ご静聴ありがとうございました。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3卷2号、014-018

特集 インクルーシ브なメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

비판적 유튜브 읽기

김현주, 박한나, 이지현, 유경혜

안녕하세요? 디지털 시민성 교육을 위해서 유튜브 비판적 읽기라는 주제를 가지고, 부모와 초등학생 자녀를 대상으로 2020년 9월과 11월에 각각 운영한 교육 사례를 발표하겠습니다. 이 교육은 김현주, 박한나, 이지현 그리고 저 유경혜 4명이 함께 기획하고 실시하였습니다.

저희 4명은 시청자미디어재단 서울센터에서 2019년부터 미디어 리터러시 스테디를 해온 미디어 강사들입니다.

10대에게는 유튜브가 소셜미디어를 넘어서 디지털을 접하는 퍼스트 스크린이고, 또 10대는 유튜브를 통해서 세상을 읽습니다

학부모 교육에서 항상 나오는 질문이 있습니다. 자녀가 어린 부모들은 스마트폰 언제 사줘야 하나?가 가장 많구요, 그 다음으로 나오는 질문은 유튜브와 게임 하루에 얼마나 허용해야 하는지입니다.

부모는 자녀들이 유튜브에서 나쁜 콘텐츠를 볼까봐, 또 스마트폰 과의존이 될까봐 전전긍긍하고 있었고, 반면 학생들 수업에 가보면 학업 스트레스도 풀고 또 배우는 것도 많은 그 좋은 유튜브를 왜 어른들은 못 보게 하는지 불평이 많았습니다.

저희는 미디어교육 스테디를 하면서 최근 관심이 높아진 팩트체크 교육, 그리고 영상제작교육과 함께 유튜브에 대한 비판적 읽기교육이 필요하다고 생각했습니다. 특히, 유튜브 제작교육에 앞서서 비판적 읽기 교육이 먼저 준비되어야 한다고 생각해서 유튜브 리터러시 교육 프로그램을 기획하기 시작했습니다.

저희는 유튜브를 탄생하게 한 미디어 환경의 변화에서부터 유튜브의 역사와 특징, 유튜브의 매력, 알고리즘, 문제점, 유튜브의 자체 대응방법, 유튜브 관련 산업과 수익구조, 유튜브 활용법을

비롯하여 디지털 시민성까지 유튜브를 주제로 한 서적, 논문 등 관련 문서를 모두 정리하기 시작했습니다.

그렇게 해서 2 시간씩 12 차시 교육 프로그램을 만들었습니다. 유튜버가 되어 채널을 만들고 영상을 제작하기 전에 하는 교육이라고 상정하고 유튜브의 모든 것을 담아보았습니다.

이후 서울시청자미디어센터의 지원을 받아 실행할 수 있게 되어서 12 차시 교육안을 8 차시로 압축했습니다 8 차시로 압축하면서 세운 교육목표는 다음과 같습니다. 대중매체인 TV와 유튜브의 차이를 알고 유튜브 콘텐츠를 비판적으로 수용하고 올바르게 이용하는 방법을 터득한다. 유튜브 플랫폼에 대한 이해를 바탕으로 개인에게 적용 가능한 정보를 확인하고, 학습 여가 진로 문화 향유 등 실생활에서 유용하게 활용할 수 있다. 유튜브 콘텐츠 제작과 관리, 채널 운영에 필요한 기초지식을 얻어 자신의 채널을 기획하고 그에 맞는 콘텐츠의 제작 계획서를 작성할 수 있다. 이것을 교육 목표로 삼았습니다.

교육목표에 맞춰서 유튜브 플랫폼에 대한 이해와 콘텐츠 비판적 읽기 그리고 채널 운영을 위한 기획서 작성을 내용으로 디지털 시민으로서 윤리를 비롯한 필수 역량에 대해서 생각을 정리할 수 있도록 교육을 구성했습니다.

서울 용산 도서관에서 유튜브 리터러시 교육을 실제로 운영했었는데, 용산도서관측에서는 8 차시를 부모교육과 초등학생 자녀교육 각각 4 차시씩 하기를 원했습니다. 그렇잖아도 매개자 교육에 관심을 가지고 있던 저희는 다시 유튜브 리터러시를 부모와 자녀라는 다른 학습자를 대상으로 재정리했습니다.

4 차시로 줄여진 프로그램에서의 목표는 이렇게 정했습니다. 유튜브는 방송과 다르기 때문에 방송에서는 볼 수 없는 다양한 종류의 콘텐츠가 있고, 또 방송과 다르게 심의나 규제가 없어서 문제점이 발생한다. 유튜브는 콘텐츠를 우리에게 판매하는 것이 아니라 우리와 같은 이용자들을 광고주에게 판매하고 있다, 그래서 이용자들이 오래 머무르게 하는 것을 목적으로 알고리즘을 개발했다는 것, 이런 유튜브 플랫폼에 대한 이해를 바탕으로 실생활에서 학습, 여가, 진로, 문화향유 등으로 잘 활용하는 방법을 생각해 보는 것, 이 세가지를 목표로 정했습니다.

먼저 부모를 대상으로 한 프로그램 교육내용을 말씀드리겠습니다. 부모교육은 유튜브 아는 만큼 내 아이 교육의 길도 보인다라는 제목으로 실시간 쌍방향 온라인 교육으로 진행했습니다. Zoom을 이용해서 진행했구요, 첫 번째 시간에는 디지털 미디어 환경의 변화와 디지털 사회의 특징에 대해서 이야기 했습니다.

두 번째 시간은 유튜브의 문제점과 그 원인 그리고 유튜브 콘텐츠 비판적 읽기의 중요성에 대해

서 강의를 진행했구요,

세 번째 시간은 유튜브 알고리즘에 대해서 그 목적과 편리함에 따른 함정을 이야기 했습니다.

마지막 시간에는 디지털 사회의 시민으로서 무엇이 필요한지, 디지털 시민의 현명한 미디어 이용법에 대해서 이야기 나누었습니다.

비대면 프로그램의 장점을 살려서 채팅과 주식달기 기능을 이용해서 수업 참여를 유도하였고, 성인이었기 때문에 활동지 작성이 아니라 주제 토의 형식으로 활동을 진행했습니다. 토의 주제는 다음과 같습니다. 2020년 9월에 대표적인 사회적 이슈였죠, 디지털 범죄와 디지털 교도소에 대해서, 그리고 아이의 스마트폰을 검사해야하는가, 우리아이가 보는 유튜브와 나의 걱정은 무엇인지, 그리고 마지막으로 각 가정에서 정한 유튜브 이용 규칙을 소개하는 활동을 하였습니다.

11월에 진행한 초등학교 4 차시 강의는 대면으로 진행했습니다. 교육 차시별 주제와 내용은 부모 교육과 유사합니다만 초등학교이라는 학습대상의 특성에 맞추어 전달 방식과 활동을 준비했습니다. 첫 번째 시간에는 유튜브는 모든 것을 담고 있다라는 주제로 유튜브의 매력과 나의 유튜브 이용기록을 살펴보는 수업을 진행했고,

두 번째 시간은 어른들은 왜 유튜브를 마음껏 보지 못하게 할까? 라는 제목으로 유튜브의 문제점과 비판적 읽기를 이야기 했습니다. 1 차시에 좋은 콘텐츠의 기준을 이야기 해보았다면 2 차시에는 나쁜 콘텐츠의 기준과 그 나쁜 콘텐츠를 만드는 유튜버의 의도를 생각해보았습니다.

세 번째 시간은 유튜브는 내가 좋아하는 영상을 어떻게 알고 있지? 라는 제목으로 알고리즘에 대해서 알려주고 알고리즘이 나에게 미치는 영향을 생각해보도록 하였습니다.

마지막 시간에는 건강한 유튜브 여행이라는 제목으로 온라인의 나와 오프라인의 나를 비교해보고 디지털 발자국을 비롯하여 슬기로운 디지털 시민으로서의 상식과 규칙을 정리해보았습니다.

학습자가 초등학교이고, 교육환경이 대면수업이었기 때문에 다양한 활동거리와 도구를 준비해서 진행하였습니다. 유튜브 이용습관을 점검하기 위해서 유튜브 생활시간표를 그려보고, 생활시간표를 보면서 자신의 미디어 이용 습관을 점검해 보았습니다, 좋은 콘텐츠의 조건에 대해 자신의 생각을 적고, 스티커로 투표하는 활동을 해보았구요, 영상의 특징을 이해하기 위해 콘텐츠 분석하는 활동과 미디어의 특성을 교육하기 위한 OX 퀴즈 등을 활동으로 진행했습니다. 알고리즘의 이해를 위해서 인기 캐릭터인 펭수에게 유튜브 영상을 추천하는 활동 했었는데요, 아이들이 무척 즐거워했습니다.

어떤 식으로 교육이 이루어졌는지 잠시 보시죠.

저희가 정리한 교육의 성과를 말씀드리겠습니다. 먼저 학습자 성과로는 자녀의 육아 도우미 정도로 여겼던 유튜브의 실체에 대해서 이해했고, 미디어 콘텐츠에 대한 비판적 역량과 소비자로서의

미디어 윤리를 익힐 수 있었습니다. 또한 자녀의 미디어 이용에 대한 지도 방법을 비롯하여 부모 지식 간의 상호 이해도가 향상되었습니다.

교수자 성과로는 유튜브 리터러시 교육 프로그램을 개발한 점, 부모와 자녀 각 학습자 특성에 맞춘 프로그램으로 재구성 한 점, 그리고 대면, 비대면 방식 모두 교육을 실행해 본 점 마지막으로 4명의 협업으로 교육 내용의 질적 향상은 물론 강사 개인의 역량이 강화된 점을 말씀드릴 수 있습니다.

마지막으로 이 발표를 준비하면서 저희 4명이 다시한번 지난 교육경험을 되돌아봤는데, 지난 교육경험을 통해서 통해서 깨달음이랄까요, 발견한 것들에 대해서 생각해보았습니다.

같은 내용을 부모와 자녀를 대상으로 교육을 하면서 부모들이 아이들의 미디어 사용과 자신들의 미디어 사용을 다르게 인지하고 있음을 발견하였습니다. 부모들은 “나는 비판적으로 적절하게 미디어를 사용할 수 있지만, 아이들은 그렇지 않다.” 라고 생각하고 있었는데, 아이들은 오히려 자신보다 엄마가 더 스마트폰 중독이라고 말하기도 했습니다. 성인의 경우는 자신의 미디어 리터러시 역량을 정확하게 보게 하는 것이 교육의 시작이었습니다.

글은 읽고 쓸 줄 모른다고 하면 크게 문제가 있다고 누구나 생각합니다. 숫자를 모르거나 계산을 못한다는 것도 문제가 있다고 판단합니다만 미디어를 활용한다는 것, 미디어 콘텐츠를 제대로 이해한다는 것이 중요하다는 것에 대해서는 그 중요성을 정확히 인식하지 못하고 미디어를 TV 혹은 게임기의 연장으로 생각하는 경향이 있었습니다.

국어와 수학 같은 정규 교과목에서는 학령별 성취수준이 있지만 미디어는 개인이 속한 환경과 관심도에 따라서 편차가 생깁니다. 학생 또는 성인으로 학습자를 구분해서 강의를 준비해서 가지만 사실 현장에 가보면 개인에 따라 수준이 달라질 때가 있습니다. 성인이지만 초등학교 자녀보다 미디어 역량이 떨어지는 사람도 있고, 아이들은 가정 분위기나 경제적 여건에 따라서 미디어 활용 역량이 달라지기도 하였습니다. 이 부분이 힘들기도 했고 한편 안타깝기도 한 부분이었습니다.

요즘 우리는 1인1디바이스 시대에다 알고리즘으로 사실 한 가족이지만 다른 세상을 보고 다른 세상에 살고 있는 것 같습니다. 유튜브 비판적 읽기 프로그램을 통해서 서로 다른 곳을 바라보고 소통하지 못했던 부모와 자녀간에 유튜브를 주제로 함께 이야기를 나눌 수 있는 계기가 되었기를 기대 합니다. 저희는 디지털로 인해서 단절되는 것이 아니라 디지털을 통해서 오히려 세대간 이해의 관계맺음을 시작할 수 있지 않을까 하는 생각을 합니다. 요즘 그 어느 때보다 세대간 소통이 안되고 있다고 말할 하는데, 한편으로는 시니어 유튜버 밀라노나라든지 과거의 콘텐츠를 담은 탐골공원 등 유튜브를 통해서 오히려 다른 세대를 바라보는 계기가 생기고 있는 것도 사실입니다. 유튜브 비판적 읽기를 비롯한 디지털 시민성 교육은 세대 갈등 뿐만 아니라 서로 다른 지점에 서있는 사

람들 간에 이해와 존중을 이끌어 낼 수 있는 기회를 만드는 첫걸음이 되리라 생각합니다.

法政大学図書館司書課程

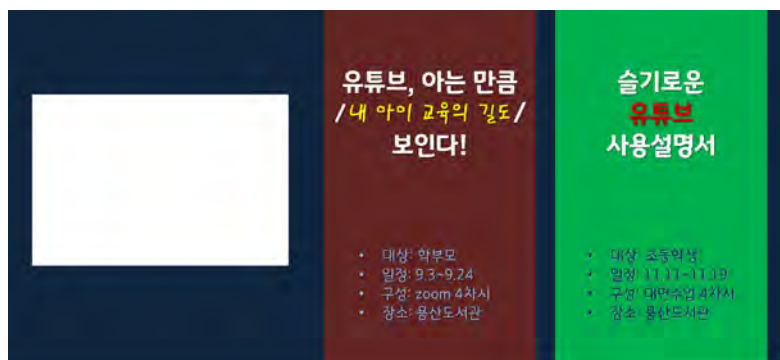
メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、019-029

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

デジタル・シティズンシップ教育としての YouTubeの批判的読解

キム・ヒョンジュ パク・ハンナ イ・ジヒョン ユ・ギョンヘ

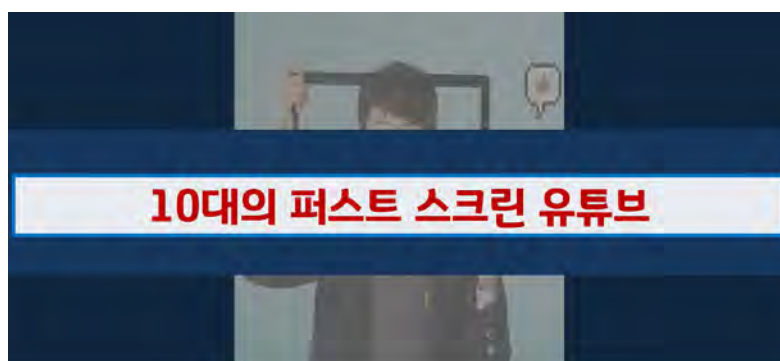
皆様こんにちは。デジタル市民性教育のため、批判的ユーチューブ・リーディングをテーマに、親と小学生の子どもを対象として、2020年9月と11月にそれぞれ実施された教育事例を発表いたします。この教育はキム・ヒョンジュ、パク・ハンナ、イ・ジヒョンと私ユ・ギョンヘの4人が一緒に企画いたしました。



私たち4人は、視聴者メディア財団ソウルセンターで、2019年からメディアリテラシー勉強会を行ってきたメディア講師です。



10代にとってユーチューブは、ソーシャルメディアを超えるファーストスクリーンであり、ユーチューブを通じて世間とつながっています。



保護者から教育現場に対する質問の中でよく聞かれるのは、子どもにスマホはいつから持たせるべきかという質問です。二番目に多いのは、「ユーチューブとゲームは、1日何時間まで許容できるか」という質問です。

親は子どもがユーチューブで好ましくないコンテンツに接するのではないかと心配しています。一方で子どもたちは、勉強のストレスも解消でき、さらに学べることも多いユーチューブなのに、どうして大人は反対しているのか不満が多いようです。

当センターでは、メディア教育スタディーを通して、最近関心が高まっているファクトチェック教育、そして映像制作教育と共に批判的ユーチューブ・リーディング教育が必要だと考えました。特に、ユーチューブの制作教育に先立って、批判的なリーディング教育の必要性を感じましたので、ユーチューブ・リテラシー教育プログラムを企画しました。



ユーチューブ・リテラシー構成方法

当センターでは、ユーチューブを誕生させたメディア環境の変化から、ユーチューブの歴史と特徴、ユーチューブの魅力、アルゴリズム、問題点、ユーチューブの独自対応方法、ユーチューブ関連産業と収益構造、ユーチューブ活用法、デジタル市民性までのユーチューブをテーマにした書籍、論文などの関連文書を全て整理しました。

유튜브 리터러시 어떻게 구성되어 있나?



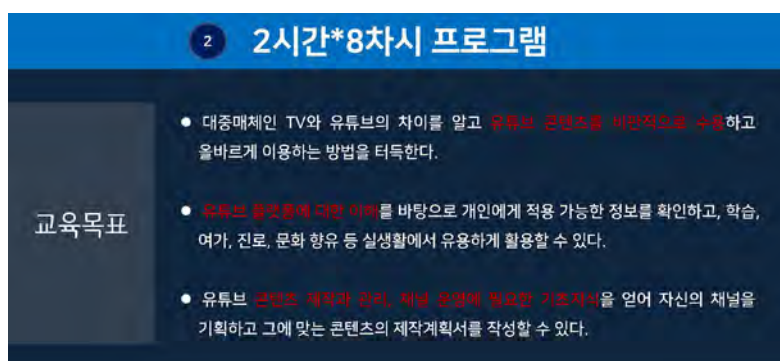
そして、2時間ずつ12回の教育プログラムを構成しました。ユーチューバーになってチャンネルを作り、映像を制作する前に行う教育であると想定して、ユーチューブに全てを盛り込んでみました。

1 2시간*12차시 프로그램

<ul style="list-style-type: none"> 1차시 1교시 미디어환경의 이해 2차시 2교시 디지털환경의 이해 3차시 3교시 유튜브 역사 4차시 4교시 유튜브 역사 5차시 5교시 유튜브 역사 6차시 6교시 유튜브 역사 7차시 7교시 유튜브 알고리즘 8차시 8교시 유튜브 알고리즘 9차시 9교시 유튜브 알고리즘 10차시 10교시 유튜브 알고리즘 11차시 11교시 유튜브 알고리즘 12차시 12교시 유튜브 알고리즘 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 현재 미디어 환경 & 생태계 이해 2. 유튜브 역사와 특징 - 누구나 콘텐츠 생산, 레거시 미디어와 비교, 유튜브 방송의 구성 3. 다양한 콘텐츠 - 유튜브 유저의 하루, 내가 원하는 내 취향 콘텐츠 찾기 4. 유튜브 알고리즘 - 필터버블 5. 콘텐츠 비판적 읽기 - 방대한 양 - 사전 심의 및 모니터링 어려움 6. 유튜브 자체적 대응과 필터링: 논란 막기 7. 초보 유튜버 실수 모음기 1: 개인 - 초상권, 저작권, 채널 관리 8. 초보 유튜버 실수 모음기 2: 시스템 - 수익구조 9. 유튜브 활용1(유저): 인기 영상 트렌드, 분야 별 추천 콘텐츠, 채널 소개 10. 유튜브 활용2(크리에이터): 기획 요소 11. 디지털 시민성: 생보자로서 미디어 윤리, 디지털 세상의 소통과 참여 12. 나의 유튜브 여행기 - 수업 전후 변화, 수업 후기, 추천 채널과 콘텐츠
--	---

その後、ソウル視聴者メディアセンターから支援を受けて実行できるようになり、12回の教育案を8回に圧縮しました。それらの教育目標は以下のとおりです。

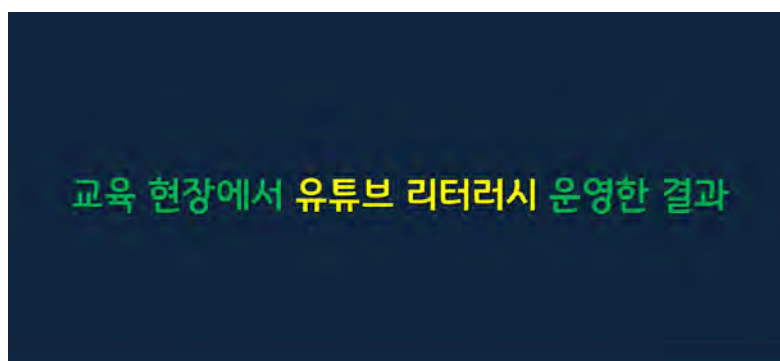
「マスメディアのテレビとユーチューブの差を理解した上で、ユーチューブコンテンツを批判的に受け入れ、正しく利用する方法を身につける。」「ユーチューブプラットフォームに対する理解をもとに個人に適用可能な情報を確認し、学習方法・余暇時間の活用・進路・文化の享受など、実生活で有効に活用できる。」「ユーチューブコンテンツの制作と管理、チャンネル運営に必要な基礎知識を身につけて、自分のチャンネルを企画し、それに合ったコンテンツの制作計画書を作成することができる。」



教育目標に合わせて、ユーチューブ・プラットフォームに対する理解と、コンテンツの批判的リーディング、チャンネル運営のための企画書作成をしました。デジタル市民としての倫理をはじめとする必要な能力に対する概念を整理できるように教育を構成しました。



教育現場でユーチューブ・リテラシーを運営した結果



ソウル龍山図書館で、ユーチューブ・リテラシー教育を実際運営しましたが、龍山図書館側では8回の教育を保護者教育と子どもの教育をそれぞれ4回ずつに分けてしてほしいとのニーズがありました。

ちょうど媒介者教育に関心を持っていた当センターでは、再度ユーチューブ・リテラシー教育を親と子どもの学習者を対象として再整理しました。

教育プログラムは4回に設定し、以下のように目標を決めました。

「ユーチューブは放送とは異なるため、放送では見られない多様なコンテンツがあり、また放送と違って審議や規制がないため問題が発生する。」「ユーチューブはコンテンツをユーザーに販売するのではなく、私達のような利用者を広告主に販売している、そのため、ユーザーが少しでも長居させることを目的にアルゴリズムを開発したこと、このようなユーチューブ・プラットフォームに対する理解を基に実生活で学習、余暇、進路、文化享受などに上手く活用する方法を考えてみること。」

この3つを目標に決めました。



まず、親を対象に行うプログラムの教育内容について申し上げます。親の教育は、「ユーチューブを知らないと、自分の子どもの教育方法も見えない」というタイトルで、リアルタイムで双方向オンライン教育で行いました。Zoom を使いました。

1 回目は、デジタルメディア環境の変化とデジタル社会の特徴について話し合いました。

2 回目は、ユーチューブの問題点とその原因、そしてユーチューブ・コンテンツの批判的リーディングの重要性について講義を行いました。

3 回目では、ユーチューブ・アルゴリズムについて、その目的と利便さによる落とし穴について話し合いました。

最後の4 回目では、デジタル社会市民として必要なものはなにか、デジタル市民の賢明なメディア利用法について話し合いました。

**유튜브, 아는 만큼
/내 아이 교육의 길도/
보인다!**

- 대상: 학부모
- 일정: 9.3-9.24
- 구성: zoom 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 9/3(목) 10:00-12:00	미디어 환경의 이해: 갯튜브가 된 유튜브	<ul style="list-style-type: none"> - 대중매체와 디지털 미디어 등장 - 디지털 사회의 특징 - 갯튜브가 된 유튜브 - 엄마가 낳고 유튜브가 키운다?

**유튜브, 아는 만큼
/내 아이 교육의 길도/
보인다!**

- 대상: 학부모
- 일정: 9.3-9.24
- 구성: zoom 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 9/10(목) 10:00-12:00	유튜브 해부1: 유튜브의 문제점과 비판적 읽기	<ul style="list-style-type: none"> - 유튜브의 문제점과 원인 - 유튜브 자체 대응과 국가별 차이 - 유튜브 콘텐츠 비판적 읽기의 중요성 - 당신의 선택은? 법적규제vs자율규제 - 유튜브 중독 탈출작전: 디지털 웰빙

**유튜브, 아는 만큼
/내 아이 교육의 길도/
보인다!**

- 대상: 학부모
- 일정: 9.3-9.24
- 구성: zoom 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 9/17(목) 10:00-12:00	유튜브 해부2: 알고리즘의 이해	<ul style="list-style-type: none"> - 알고리즘이란 무엇인가? - 데이터와 필터링, 유튜브 알고리즘 - 알고리즘 체험: 유튜브 영상 추천하기 - 유튜브 알고리즘의 목적 - 알고리즘의 편리성과 함정

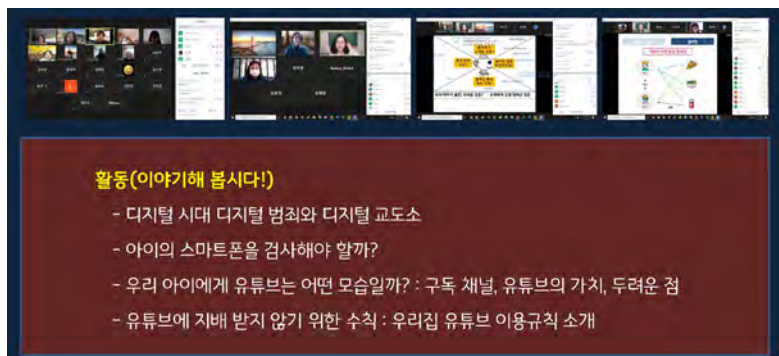
**유튜브, 아는 만큼
/내 아이 교육의 길도/
보인다!**

- 대상: 학부모
- 일정: 9.3-9.24
- 구성: zoom 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 9/24(목) 10:00-12:00	유튜브와 디지털 시민성	<ul style="list-style-type: none"> - 초연결사회, 디지털 문화와 문제인식 - 디지털 시민성, 우리 아이 어떻게 키우나? - 디지털 시민으로서 갖추어야 할 5가지 - 디지털 시민의 현명한 미디어 이용법 - 유튜브의 바다, 우리 가족의 좌표는?

非對面プログラムの長所を活かして、チャットとコメント機能を使って授業への参加を誘導し、大人なので活動紙を作成する方法ではなく、主題討議形式で活動しました。討議のテーマは以下の通りです。2020年9月に代表的な社会問題であった、「デジタル犯罪とデジタル刑務所について」、そして「子どものスマートフォンを検査するべきか、子どもが見ているユーチューブは何なのか」、「親が心配していることは何か」、最後に「各家庭で決めたユーチューブ利用規則を紹介する」活動を行いました。

11月に行った小学生の4回目の講義は対面で行いました。教育回数別のテーマと内容は親の教育とほぼ同じですが、小学生という学習者の特性に合わせて、伝達方法と活動を準備しました。1回目では、「ユーチューブは全てを盛り込んでいる」というテーマで、ユーチューブの魅力と自分のユーチューブの利用記録を観察する授業を行いました。



2回目では、「大人たちがユーチューブ視聴を制限する理由はなにか」というタイトルでユーチューブの問題点と批判的リーディングについて話し合いました。1回目は良いコンテンツの基準について話し合いましたが、2回目は悪いコンテンツの基準と、その悪いコンテンツを作るユーチューバーの意図について考えてみました。

3回目は、「ユーチューブはユーザーが好む映像について、どういう方法で把握するのだろうか?」というタイトルでアルゴリズムについて教え、アルゴリズムに及ぼす影響について考えてみました。

最後の4回目は、「健全なユーチューブ旅行」というタイトルで、オンライン上の自分と、オフラインの自分を比較し、自分のデジタルの足跡をはじめ、賢明なデジタル市民としての常識と規則についてまとめてみました。

슬기로운
유튜브
사용설명서

- 대상: 초등학생
- 일장: 11.11-11.19
- 구성: 대면수업 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 11/11(수) 16:00-18:00	유튜브는 모든 것을 담고 있다?!	- 유튜브의 시작과 현재 - 나의 유튜브 생활시간표
	- 유튜브가 세계를 사로잡은 비결	- 유튜브가 갓튜브가 된 이유 - 추천 유튜브 & 채널

슬기로운
유튜브
사용설명서

- 대상: 초등학생
- 일장: 11.11-11.19
- 구성: 대면수업 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 11/12(목) 16:00-18:00	어른들은 왜 유튜브를 마음껏 보지 못하게 할까?	- 내가 경험한 유튜브의 문제 - 유튜브의 문제점
	- 유튜브의 문제점과 비판적 읽기	- 유튜브 콘텐츠 비판적 읽기의 중요성 - 토론: 10대 유튜브 이용제한 찬반 - 비추천 유튜브 & 채널

**슬기로운
유튜브
사용설명서**

- 대상: 초등학생
- 일차: 11.11-11.19
- 구성: 대면수업 4차시
- 장소: 용산도서관


강의일	강의주제	강의내용
2020년 11/18(수) 16:00-18:00	유튜브는 내가 좋아하는 영상을 어떻게 알고 있지? - 유튜브 알고리즘	- 유튜브 홈화면 & 검색 콘텐츠 목록 비교 - 알고리즘이란? - 캐릭터에 맞는 유튜브 영상 추천하기 - 알고리즘 나에게 어떤 영향을 줄까? - 알고리즘과 수익의 관계 - 유튜브 이용 및 검색 기록 관리하기

**슬기로운
유튜브
사용설명서**

- 대상: 초등학생
- 일차: 11.11-11.19
- 구성: 대면수업 4차시
- 장소: 용산도서관

강의일	강의주제	강의내용
2020년 11/19(목) 16:00-18:00	건강한 유튜브 여행 - 디지털 시민성과 책임있는 유튜브 이용	- 온라인의 나 vs 오프라인의 나 - 디지털 발자국의 의미와 영향력 - 슬기로운 초등학생을 위한 디지털 상식 - 슬기로운 유튜브 이용 규칙 정하기 - 창의적이고 행복한 채널 기획하기

学習者が小学生であり、教育環境が対面授業だったので、様々な活動シーンとツールを用意して行いました。ユーチューブの利用習慣を把握するため、ユーチューブ生活のタイムテーブルを書いてみたり、生活タイムテーブルを見ながらメディアの利用習慣を把握してみました。良いコンテンツの条件について自分の考えを書いてみたり、ステッカーで投票する活動もやりました。映像の特徴を理解するためにコンテンツを分析する活動と、メディアの特性を教育するための「〇×クイズ」などの活動も行いました。アルゴリズムを理解するために、人気キャラクターのペン스에ユーチューブの映像をおすすめする活動では、子どもたちはとても喜びました。



활동

- 나의 유튜브 생활 시간표 : 유튜브 이용 습관 점검
- 좋은 유튜브 콘텐츠의 조건 : 포스트잇에 적어 붙이고 스티커로 투표하기
- 유튜브 콘텐츠 분석하기 : 영상 스토리텔링의 이해
- OX 퀴즈 : 유튜브와 미디어, 그것이 알고 싶다!

교육을 마치고

当センターがまとめた教育の成果について申し上げます。まず、学習者の成果としては、子どもの育児ヘルパー程度に考えられていたユーチューブの実態について理解し、メディアコンテンツに対する批判的能力とプロシューマー（生産者であり、消費者である人）としてのメディア倫理を身につけることができました。また、子どものメディア利用に対する指導方法をはじめ、親子間の相互理解度も高まりました。

교육 성과: 학습자 성과

- 자녀의 욕아 도우미 → 유튜브 실제, 미디어 환경변화 이해
- 미디어 콘텐츠에 대한 비판적 역량 강화
- 자녀의 미디어 이용 지도 방법
- 소비자로서의 미디어 윤리 학습
- 디지털 미디어 긍정적 활용법
- 부모-자녀간의 상호이해도 향상

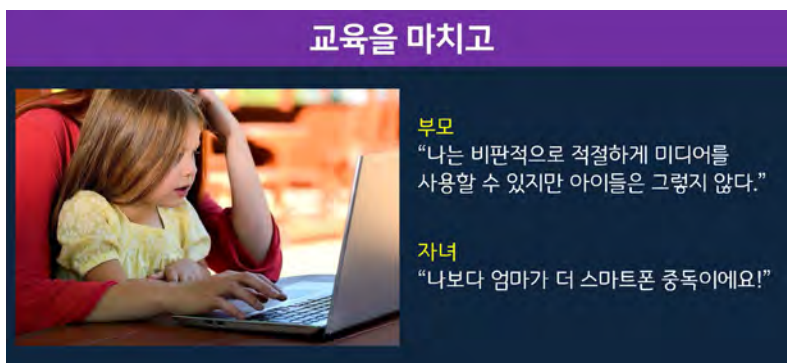
教授者側の成果は、ユーチューブ・リテラシー教育プログラムが開発できたこと、親子の各学習者の特性に合わせたプログラムとして再構成できたこと、そして対面・非対面方式の両方教育を実行したこと、最後に4人の協業によって教育内容の質的向上はもちろん、講師一人一人の能力が強化された点で成果と言えます。

교육 성과: 교수자 성과

- 유튜브 리터러시 12차시 개발
- 서울시청자미디어센터 강사지원사업 선정: 전문가 멘토링, 현장 적용 기회
- 부모와 자녀, 학습자 특성 고려한 맞춤형 프로그램으로 재구성
- 비대면/대면으로 유튜브 리터러시 교육을 다양한 방식으로 접근·실행함
- 4인의 협업으로 인한 교육내용의 질적 향상, 강사 개개인의 역량강화

最後に、本日の発表準備をしながら、私共4人はもう一度今回の教育経験を振り返ってみました。今回の教育経験を通じて得られたこと、見つけられたことを申し上げます。

同じ内容について、親と子どもを対象に教育を通して、親が子どもたちのメディア使用と、自分のメディア使用について異なる認識をしていることを発見しました。親たちは「私は批判的に適切にメディアを使うことはできるが、子どもたちはそうではない」と考えていましたが、子どもたちはむしろ自分より母親のほうがスマートフォン中毒になっていると話しました。つまり、大人のメディアリテラシーの力量を正確に理解できるようにすることが教育の出発点なのです。

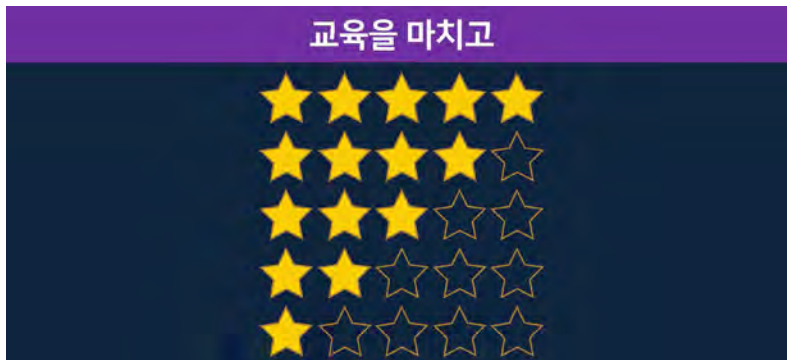


文字の読み書きができないことは、大きな問題だと思えます。数字や計算ができないことも問題だと判断しますが、メディアを活用すること、メディア・コンテンツを正しく理解することの重要性については、その重要性を正確に認識できないまま、メディアをテレビやゲーム機の延長線のように考える傾向がありました。



国語と数学のような正規教科では学齢別に達成水準がありますが、メディアは個人が属する環境と関心度によって差がありました。私たちは、子どもから大人まで、学習者を分けて講義を準備しますが、教育現場では各個人によってレベルが異なることがあります。大人でも小学生の子どもよりメディア能力が足りない場合もあるし、子どもたちの家庭の雰囲気や経済的条件によってメディア活用能力が異なることもありました。このような点が大変であり、心配な要素でした。

最近の世の中は、1人1デバイスの時代、アルゴリズムの影響によって、家族や個々人がぜんぜん違う世界で生きているような感じですが、ユーチューブの批判的リーディング・プログラムによって、互いに異なる世界で生活しているため、コミュニケーションできなかった親子がユーチューブをテーマに一緒に話し合うきっかけになることを期待します。私たちはデジタルによる断



絶ではなく、デジタルによって世代間に円満な利害関係が形成されることを期待します。この頃は世代間のコミュニケーションがなかなかできないと言われますが、一方では、シニアユーチューバーのミラノンとか、過去のコンテンツを盛り込んだタップgol公園など、ユーチューブによって、むしろ違う世代を理解するきっかけにもなりました。ユーチューブの批判的リーディングやデジタル市民性教育は、世代間の葛藤だけでなく、お互いに異なる立場にいる人々の間に、相互理解と尊重することができる雰囲気作りに近づく契機になりました。



ご清聴ありがとうございました。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3卷2号、030-033

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

케어의 대상에서 케어의 주체로

송헌기

안녕하세요?

저는 30 여년간의 공직생활을 하고 2006 년도에, 58 세의 나이로 정년 퇴임을 하였습니다.
지금은 광주시청자미디어센터 미디어봉사단 S 단장을 맡고 있는 송헌기입니다.

미디어봉사단 S 는 광주시청자미디어센터에서 여러 가지의 미디어교육을 수료한 60 대, 70 대의 노년층으로 함께 모인 미디어 자원봉사 동아리입니다.

자신이 센터에서 무료로 공부한 지식을 사회에 다시 돌려드리고자 2008 년에 조직을 하였습니다.

자원봉사 동아리로 조직된 미디어봉사단 S 의 S 뜻은 ...3S 인데요 ...

어르신들이 미디어봉사를 한다는 그 자체가 ‘특별하다’ 하여 Special 과
이런 미디어 봉사가 ‘전파처럼 퍼져 나가면 좋겠다’ 하여 Spillover,
그리고 봉사를 하면서 ‘웃으면서 하자’ 라는 의미가 담긴 Smile 이 3S 입니다.

지금부터 운영사례를 중심으로 미디어봉사단 S 를 살펴 보도록 하겠습니다.

미디어봉사단 S 의 중요한 역할은 값진 교육봉사와 함께 나누는 기록봉사,
그리고 더불어 활동하며 친교하는 기획행사라 하겠습니다.

교육봉사는 센터의 교육시설을 활용하여 노년층을 대상으로 시니어 프리미어 CC2020, Adobe 포토샵 2021, 에프터 이펙트, 시니어 스토리 텔링 및 스마트폰 활용교육과 스마트폰으로 동영상 만들기 교육, 내 자서전 만들어보기, 영상연하장 만들기 그리고 봉사단 양성 교육을 전담하고 있습니다.

또한 소외계층을 찾아가 노인들과 직접 만나서 노인들이 궁금해하는 미디어 대하여 가르쳐 드리며, 이러한 교육을 잘 수행하기 위하여 노년층 미디어교육 활성화를 위한 교육개발도 하고 있습니다.

다.

하지만 노년층을 상대로 하는 미디어 교육은 그렇게 녹녹치는 않습니다.

컴퓨터를 다루는 능력이 천차만별이며 영상 용어를 이해하는 편차가 대단히 큼니다.

사진이나 동영상을 촬영하는 기법과 편집기술을 습득하기 위해 영상 편집 툴을 공부하는 데에 많은 시간이 필요합니다.

어르신들의 반복되는 질문으로 교육을 진행하는데 차질이 생기기도 하고, 어떤 어르신은 1:1 지도를 요구하기도 합니다.

특히 영어 영상 용어를 힘들어 하고 배운것을 금방 잊어버리기 때문에 몇 번이고 반복 학습을 해야 되는 현실이기도 합니다.

우스게 소리로 ' 쉬는 시간에 화장실 다녀오면 다 잊어 먹어요 ' 라고 농담하는 어르신도 계십니다.

이런 문제를 해결하기 위하여 봉사단원을 중심으로 보조강사를 양성하였습니다. 센터에서도 시니어 교육 강사를 양성하는 특별 교육 과정을 마련하여 강사 양성에 노력을 하였습니다.

노인들에게 교육을 너무 어렵게 하면 ' 나는 못 하겠구만 ' '내가 이 나이에 이 고생을 할 필요가 있나?' 해버리면 모처럼 관심을 갖고 센터에 오셔서 영상 공부를 하려고 하였지만 이런 분에게 교육은 끝나버리는 것입니다.

교육에 안 와버리면 되는 것 아니까요 ...

마지막 한 사람이 이해될 때까지 먼저 아시는 분들은 기다려 주는 배려로 '나도 해 볼만 한데 ' 라는 자신감을 심어주는 눈높이 교육이 절실합니다.

양성한 보조강사를 한 교육장에 여러 명 배치하여, 때로는 1:4 나 1:3.

이해도가 아주 낮은 노인에게는 1:1 지원을 하여 어르신들의 눈높이에 맞는 교육을 진행하여 ' 나도 영상을 만들어 보겠다 ' 라고 하는 열정이 불타도록 동기를 부여하고 내가 만든 영상을 보면서 기쁨을 누리게 해야 합니다.

두 번째로 기록봉사인데요 ...

소외계층이나 비영리단체의 행사를 기록하여 달라는 요청이 있을 때에 봉사단이 직접 장비를 챙겨서 행사를 촬영하고 편집을 하여 기록을 보존할 수 있도록 해주고, 잊혀져 가는 문화유산을 기록하고, 영상을 만들어 50 여 편을 시청자 참여 프로그램에 제출하여 지상파를 통해 방영하였고, 정읍영화제 등 대내외 공모전에 10 번의 수상을 받기도 하였습니다.

지금은 연간 기록봉사 요청 건수가 많이 줄었지만 봉사단 창단 무렵에는 기록봉사 요청이 너무 많아서 감당하기 힘들게 되었습니다.

고민 끝에 수혜자가 직접 기록을 할 수 있게 하면 좋겠다는 생각으로 2012년에 서구자원봉사센터 미디어봉사단을 양성하고 창단하였으며

2014년에는 빛고을노인건강타운 미디어봉사단 양성 교육을 하고 창단을 지원하였습니다.

그리고 북구청과 광산구청 등 지방자치단체에 미디어교육을 진행하여 스스로 기록을 할 수 있도록 역량을 키워 주었습니다.

물고기를 잡아주지 않고 낚시하는 방법을 가르쳐 고기를 직접 잡을 수 있게 하여 준 것이지요.

어르신들은 지방의 전통문화나 문화유산에 대하여 상당한 지식을 갖추고 있습니다. 지역의 문화유산을 찾아 촬영하고 영상을 제작하기 시작하여 2016년 12월에 10개 지방자치 단체에 27편의 문화유산을 기록한 영상 DVD를 제작하여 배포하였습니다.

각자 이야기하기 쉬운 건강이나 문화, 이웃, 골목, 공동체 등을 주제로 삼아 영상을 만들어보는 스토리 텔링 교육을 진행하고 완성된 영상물은 시청자 참여 프로그램에 제출하여 방영이 되도록 하였습니다.

미디어봉사단 S는 정기총회와 월례회의, 미디어봉사단 S의 날 기념행사, 그리고 단원들의 소통을 위한 기획사업을 발굴하고 실행을 합니다.

미디어봉사단 S는 매년 1월에 정기총회를 개최하며 2월부터는 매월 월례회의를 하면서 서로 소통을 합니다.

또한 단원 가족들 까지도 서로 친해질 수 있도록 5월 21일(부부의 날)을 미디어봉사단 S의 날로 정하여 기념하고 있으며, 홀수년에는 실내 행사로 짝수년에는 실외 행사로 친교를 도모합니다.

그리고 단원 각자 각자의 취미를 살려서 함께 등산을 하거나, 악기를 배우고, 시를 낭송하며, 노래를 함께 부르는 등 단원 서로 함께 즐거워하고 어려울 때는 함께 위로하는 배려의 마음을 갖게 합니다.

센터의 지속적인 관심과 지원 속에 미디어봉사단 S는 성장 발전하여 왔습니다.

매년 10월 말 경에 실행하는 워크숍 행사와 매년 1기씩 배출하는 봉사단 양성 교육의 경비를 지원하여 봉사단 활성화를 위해 주셨습니다.

배워서 남 준다는 것이 그냥 되는 것은 아니지요 ...

자원봉사자로서의 기본을 충실하게 지켜야 되고 상대방은 존중하고 배려하는 마음과 나를 나타내지 않는 겸손과 서로의 눈높이를 맞추며 함께 활동을 하는 것이 매우 중요하다고 하셨습니다.

이러한 것들을 보증하기 위해 양성 교육 수료식에서 선서를 하고 서로가 봉사단 회칙을 철저히

지켜야 됩니다.

미디어봉사단의 확산을 위해

2012년 8월에 광주 서구자원봉사센터의 미디어봉사단 창단을 지원하고

2014년 5월에는 광주빛고을건강타운 미디어봉사단 창단지원과 9월에 대전센터 미디어봉사단을 지원하였습니다.

2017년 11월에는 울산센터 청춘미디어봉사단 창립지원과

2019년 9월에 공무원연금공단 미디어봉사단창립 지원과 11월에 강원센터 늘봄미디어제작단과 자매결연을 하였으며

2021년 6월에 세종센터 시니어와 ' 만남과 소통의 광장 '으로 미디어봉사단 S의 사례가 전국으로 전파되기를 앞장서 노력하고 있습니다.

미디어봉사를 하면서 유발되는 시니어 효과로서 노인 일자리 창출 사업인 시니어 전통시장 서포터즈 활동을 8명의 단원이 하고 있으며 IT 강사로는 11명의 단원이 활동을 하고 있습니다.

미디어를 통한 나눔의 가치 실현과 시니어세대의 인생 이모작지원에 최선을 다하는 미디어봉사단 S가 되도록 하겠습니다.

오늘도 미디어봉사단 S는 미디어를 통하여 소통하고 나눕니다.

지금까지 경청하여 주셔서 대단히 감사합니다.

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、034-042

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

ケアの対象からケアの主体へ

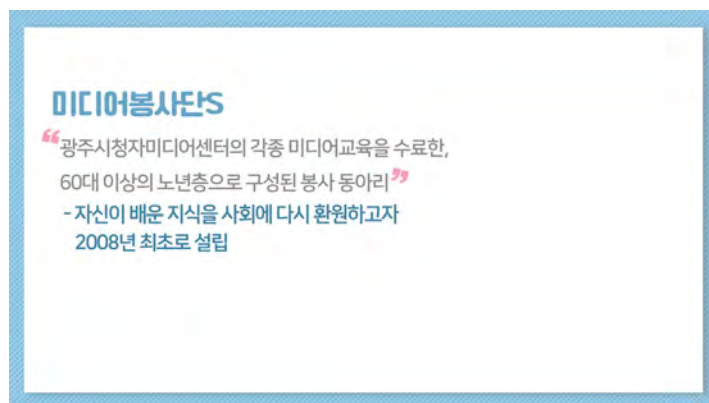
ソン・ヒョンギ

皆様こんにちは。

私は30年以上、公的機関で勤務しており、58歳になる2006年度に定年退職いたしました。現在、光州視聴者メディアセンターでメディア・ボランティアS団長のソン・ヒョンギと申します。

メディア奉仕団Sは、光州視聴者メディアセンターで多様なメディア教育を修了した60代、70代の高齢者が軸になっているメディアボランティアサークルです。

私がセンターで無料で学んだ知識を社会貢献に活かしたいと考えて、2008年に組織を立ち上げました。



ボランティアサークルとして組織したメディア奉仕団Sの「S」の意味は3つのSです。すなわち高齢者がメディアボランティアをする自体が「特別だ」という意味でSpecialのS、当メディアボランティアが「電波のように広がってほしい」という意味でSpilloverのS、そしてボランティア活動を「微笑みながらしよう」という意味を込めたSmileのSを合わせて3Sと命名しました。

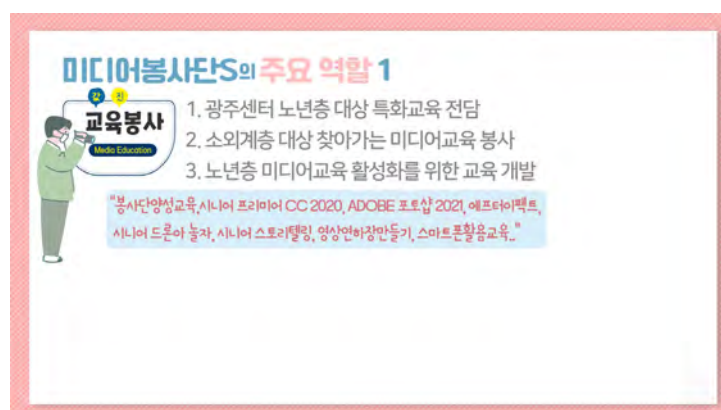


今から実践事例を中心にメディアボランティア団 S について申し上げます。

メディアボランティア団 S の重要な役割は、意味のある教育ボランティア、共に行う記録ボランティア、そして活動を通して親しく交流を深めていく企画ボランティアと言えます。



教育ボランティアは、センターの教育施設を活用し、高齢者層を対象にシニア向けの Adobe プレミア CC2020、フォトショップ 2021、アフターエフェクト、シニアストーリーテリングおよびスマートフォン活用教育とスマートフォンを使った動画制作教育、自分史作り、映像年賀状作り、そしてボランティア団養成教育を行っております。

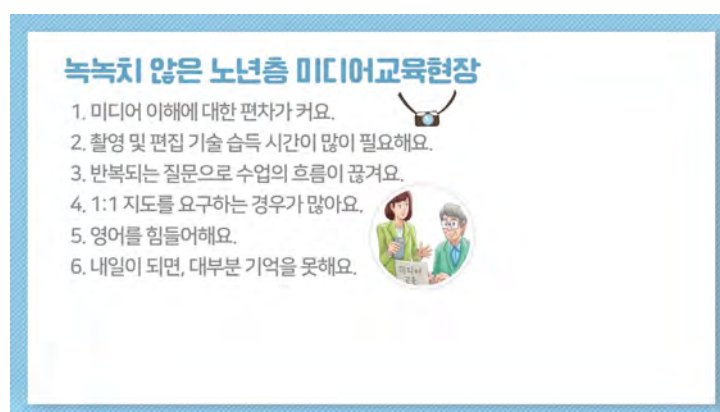


また、疎外された階層の人々を訪ねて高齢者と直接お会いし、高齢者に必要なメディアを教える教育などを行っております。高齢者のメディア教育の活性化のための教育開発も行っております。

しかし、高齢者を対象に行うメディア教育は、それほど簡単ではありません。パソコン能力が千差万別であり、映像用語に関する理解度も様々です。写真や動画を撮影する方法と編集技術を教えるために、映像編集ツールの教育に相当な時間を要します。

高齢者からの繰り返しの質問により、時間通りに教育を行うことに支障が生じたり、高齢者によっては1対1の指導を要求される場合もあります。

特に、英語映像用語が苦手な、学んでもすぐ忘れてしまう傾向がありますので、数回繰り返して学習することが現実です。冗談で「休憩時間にお手洗いに行ってきたら、すべて忘れてしまいます」とおっしゃる高齢者もいます。



このような問題を解決するために、ボランティア団員を中心に補助講師を養成しました。センターでもシニア教育講師を養成する特別教育課程を設けて講師養成に力を入れました。

高齢者が対象であるため、難しく感じられそうな学習では、「私には無理だ」「この年になってここまで苦勞をする必要があるのか?」と言われることもあって、せっかく関心を持って映像勉強のためにセンターまで足を運ばれたのに、ついに諦めてしまうことがあったり、やめてしまうことさえあります。

それでも全員理解できるまで、忍耐力をもって待つ配慮をすることで「私もできそう」という自信が持てるようになります。目線をあわせる教育が最も大切です。

養成した補助講師を追加で教育現場に複数配置し、状況に応じて1対4や1対3で行ったり、特に理解度の低い高齢者には1対1のサポートをするなど、高齢者の目線に合わせた教育を行うことで、「私も映像を作ってみよう」という情熱を引き起こさせることができます。このように動機づけしてあげることで、本人が作った映像を見ながら喜びを味わえるように配慮しなければなりません。

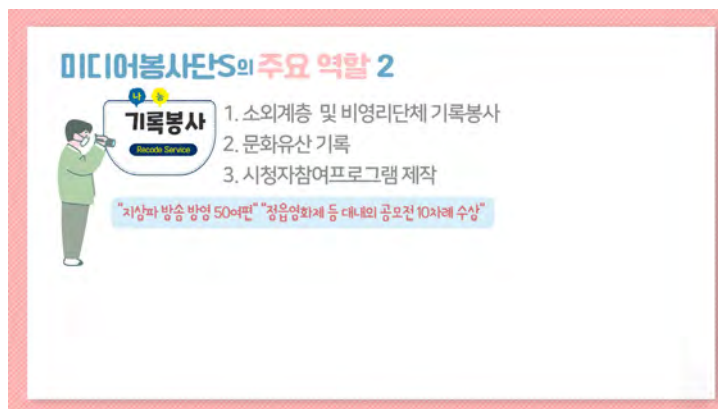


二番目は、記録ボランティアです。

社会的な弱者層や非営利団体の行事を記録してほしいと要請された時は、ボランティア団が直接装備を備えて行事の撮影から編集まで行い、記録が保存できるようにしたり、疎かにしやすい文化遺産を記録し、映像を撮って約 50 編を制作し、視聴者参加番組に提出して地上波で放映されました。これらは井邑映画祭などの国内外の公募展で 10 回も受賞しました。

最近は年間記録ボランティアの要請件数が大幅に減りましたが、ボランティア団の設立当時は、記録ボランティア要請があまりにも多くて手に負えないほどでした。

その対策として、受益者が直接記録できるようにしたほうがいいと判断したので、2012 年に



西区ボランティアセンターのメディアボランティア団を養成・創設しました。

2014年には、ビッグウル老人健康タウンのメディアボランティア養成教育を行い、創設をサポートしました。

また、北区庁や光山区庁などの地方自治体を対象にメディア教育を行い、自ら記録できるように力づけました。

つまり、魚を捕ってあげる方法ではなく、魚の釣り方を教えることで、自ら魚を捕ることができるような教え方を選びました。

高齢者は地方の伝統文化や文化遺産について深い知識を持っています。地域の文化遺産を訪れて撮影し、映像の制作を開始して、2016年12月に10の地方自治団体に27映像の文化遺産を記録した映像DVDを制作・配布しました。

話題になりやすい健康や文化、隣人、路地、共同体などをテーマに映像を作るストーリーテリング教育を行い、完成した映像は視聴者参加番組に提出して放映できるようにしました。

メディアボランティア団Sは、定期総会と月例会議、メディアボランティア団Sの日を記念するイベント、そして団員のコミュニケーションのための企画事業を発掘し、実行しております。





미디어보ランティア团 S は、毎年 1 月に定期総会を開催し、2 月からは毎月月例会議を通して相互のコミュニケーションを図ります。



また、団員の家族同士の親睦を図るため、5月21日（夫婦の日）をメディアボランティア团 S の日を決めて記念しており、奇数年には室内イベント、偶数年には屋外イベントとして親交を図ります。

また、各団員の趣味を生かして一緒に山登りをしたり、楽器を学んだり、詩の朗読や合唱など、団員が互いに楽しんだり慰めあうなど、心からの交流を目指しております。

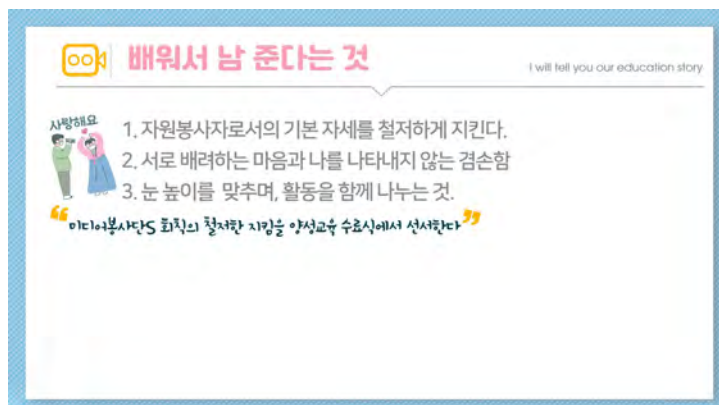


センターの持続的な関心とサポートにより、メディアボランティア団Sは、弛むことなく成長・発展してまいりました。

毎年10月末頃に行われるワークショップ行事と、毎年1期ずつ輩出するボランティア養成教育の経費を支援することでボランティア活性化のために努めました。

自分の知識を他人のために活かすためには、備えるべき心構えが求められます ...

ボランティアとしての基本を忠実に守り、相手を尊重・配慮する心構えと、自己の主張を抑える謙遜な心構えと、お互い目線を合わせ、共に活動をすることがとても重要とされます。



このような資質を保証するために、養成教育修了式で宣誓し、お互いが奉仕団の会則を徹底的に守らなければなりません。

メディアボランティアの拡大に向けて

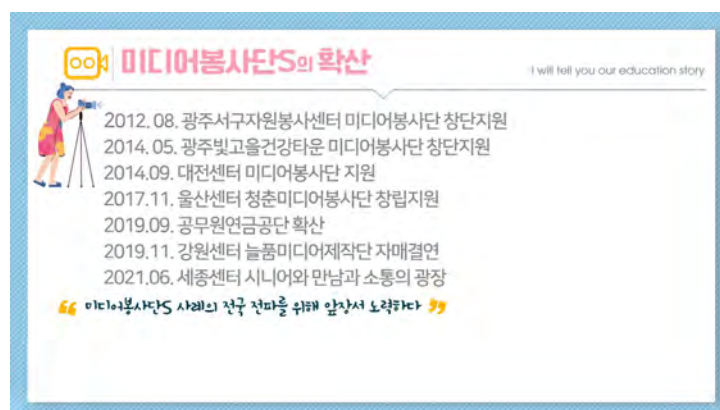
2012年8月、光州西区ボランティアセンターのメディアボランティア団設立を支援。

2014年5月、光州ビッグウル健康タウン・メディアボランティア団の創立支援、9月に大田センターメディアボランティア団を支援。

2017年11月、蔚山センターの青春メディアボランティア団創立を支援。

2019年9月、公務員年金公団メディアボランティア団の創立支援と、11月に江原センターヌルプムメディア制作団と姉妹提携を締結。

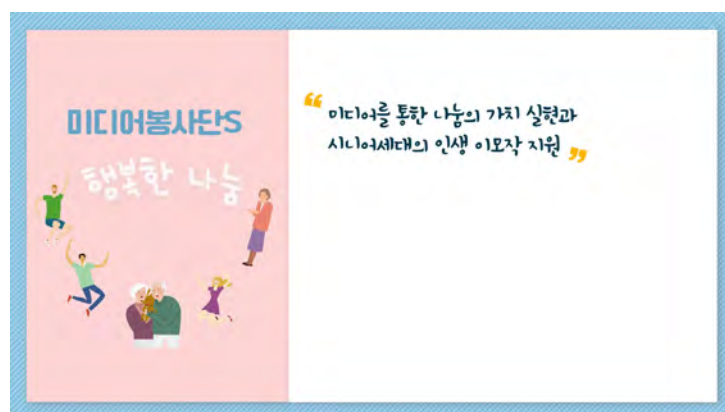
2021年6月、世宗センターシニアと「出会いとコミュニケーションの広場」としてメディアボランティアSの事例が全国に広がるように積極的に努力しております。



メディアボランティアによって誘発されるシニア効果として、老人雇用創出事業であるシニア伝統市場サポーター活動を8人の団員が行っており、IT講師としては11人の団員が活動しています。



メディアによる分かち合いの価値実現と、シニア世代の人生二毛作をサポートするために、最善を尽くすメディアボランティア団Sになれるように努力いたします。



今日もメディアボランティア団Sは、メディアを通じてさらなるコミュニケーションを図ります。

長時間ご傾聴いただき、誠にありがとうございます。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3卷2号、043-049

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

청소년 주도 온라인 혐오 대항 프로젝트 자유학기제부터 <혐오 STOP> 캠페인까지

송선영, 김상은

PART 1. 자유학기제—송선영 강사

안녕하세요 대전시청자미디어센터 강사 송선영입니다.

다양한 미디어속에서 우리는 가끔 눈살을 찌푸리게하는 댓글과 장면들을 목격하곤 했습니다.

온라인에서 특히 난무하고 있는 이 것은 바로 혐오표현입니다.

이 프로젝트에 참여하게 된 이유는 코로나 팬데믹으로 인해

더 깊어진 혐오의 감정과 혐오표현이 사회적인 갈등을 낳고 있는 상황이고

혐오표현이 특히 온라인 환경에서 미디어를 통해 쉽고 빠르게 바이러스처럼 퍼져나가고 있었기
때문입니다.

그래서 우리는 미디어를 항상 접하고 사용하는 청소년들에게

혐오표현 근절과 대항을 위해 이 교육이 꼭 필요하다고 생각했습니다.

이 프로젝트는 시청자미디어재단의 정책연구팀에서 기획, 개발하고

대전시청자미디어센터에서 진행하였습니다

[연구 및 준비과정]

4월 워크숍을 통해서 혐오 개념을 이해하고 학교 안 혐오 현상의 실태 와 대책 특강을

들으며 강사의 역량을 강화하는 시간을 가졌습니다.

그 후 완성된 교안을 토대로하여 학교의 상황에 맞게 적용하여 5월부터 교육을 시작할 수 있었
습니다.

[교육목표]

이 프로젝트의 목표는 청소년들이 온라인 미디어속의 혐오표현을 인식하고

이에 대한 대항 프로젝트를 주도적으로 진행하며
디지털 시민성을 함양하는 것입니다.

[프로젝트 과정]

중학교 1학년 대상으로 총 5차시의 온, 오프라인 수업으로 진행되었습니다.
영상과 라디오 콘텐츠 제작에 관심이 많은 학생들로 이루어진 학급입니다.
학생들은 미디어의 수용자이자 생산자입니다.
따라서 청소년들에게 바람직한 디지털 시민성이 필요함을 강조하는 수업이 진행되었습니다.

[차시별 교육과정]

교육내용에 대해서 세부적으로 소개를 하겠습니다.
1차시에서 정체성의 개념을 중점적으로 다루었습니다.
타인의 개성과 다양성을 존중하고, 혐오표현과 같은 사회적인 문제가 자신과도 밀접하게 관련이
있다고 인지하는 것을 목표로 하였습니다.

먼저 나는 어떤 사람인지, 나를 대표하는 정체성이 무엇인지 그림으로 그려보고 이야기를 나누
었습니다.

참여자들은 자신의 정체성을 나타낼 수 있는 태어난 국가, 성별, 신분 등의 내용을 적었습니다.
객관적 정보 외에도 자신의 관심사, 취미, 성격도 자유롭게 적었습니다.
이 내용을 바탕으로 강사는 참여자에게 자신을 둘러싼 고정관념, 차별, 편견은 무엇이 있는지 질
문을 던졌습니다.

예를 들어, 내가 한국에서 태어났지만, 이건 내가 선택할 수 있는 게 아니다.
그러나 아시아인이라는 이유만으로 차별을 받는다면? 이라는 질문과
여러분들이 학생이라는 이유만으로
(한국에서 학생들을 비하하는 표현인) 급식중이라는 말을 듣기도 하는데 기분이 어떤가요?
라는 질문을 통해 참여자 스스로가 이 문제에 부딪쳐 고민할 수 있도록 하였습니다.

또 소수자에 대한 부정적인 인식과, 차별, 적대적 표현이 혐오 표현라는 것을 인지하도록 하였습니다.

이후 혐오표현들의 대상자가 누구였는지 이야기해 보았습니다.

2차시는 혐오표현이 사회적 분열과 폭력을 조장할 수 있다는 점과 혐오표현의 방식에 대해 알아
보았습니다.

참여자들에게 악의가 없는 혐오 표현도 부정적으로 보아야 하는지 문제를 제기하고,
혐오표현에 대한 대항방법을 토론하였습니다.

이 사진은 한국의 한 고등학교에서 졸업사진으로 블랙페이스로 분장을 한 사진입니다. 블랙페이스는 흑인이 아닌 배우가 얼굴을 검게 칠하고 입술을 과장되게 표현하는 분장입니다. 이는 인종차별적 행위라는 비판을 받았습니다.

다음 사진은 2018 러시아 월드컵 때 멕시코 축구팬들이 SNS 를 통해 감사 인사를 하고 있는 사진입니다.

그러나 동양인을 조롱하는 '찢어진 눈' 을 하고 있어, 상당히 논란이 되었습니다.

두 예시에서 악의가 없더라도 무지함으로 인한 말과 행동이 다른 사람에게 상처를 줄 수 있다는 점,

또한 특정대상을 향한 혐오표현이 될 수 있다는 것을 알아보았습니다.

또 무의식적으로 이런 표현을 쓰고 있지 않은지 되돌아 보았습니다.

이렇게 2 차시에서는 혐오표현이 얼마나 위험한 것인지 참여자들에게 경각심을 주고 참여자들은 타인의 다양성을 존중해야 한다는 것을 이해하게 되었습니다.

3~4 차시는 참여자들이 직접 시나리오를 쓰고 콘텐츠를 제작해 보았습니다.

이러한 과정을 통해 참여자들이 타인을 대하는 태도에 관하여 고민하는 모습을 볼 수 있었습니다.

[참여자 성찰]

참여자들은 이러한 교육 이후에 혐오표현에 대해 좀 더 정확하게 인식하게 되었다는 반응을 보였습니다.

또 온라인에서 혐오표현을 본다면 논리적인 반박을 하겠다는 의지를 보였습니다.

[프로젝트 성찰]

프로젝트 이후 연구원들의 참여자 면담을 통해 얻은 성찰에 대해 정리했습니다.

참여자는 혐오표현이 사회구조적으로 발휘하는 힘에 대해 스스로 설명할 수 있었습니다.

또 혐오표현을 규제하거나 통제하는 것보다 스스로 조절할 수 있는 자기조절 능력이 필요하며 교실 혹은 사회적 분위기가 혐오표현을 듣고 웃는게 아니라 불편해하는 분위기가 되어야 한다고 말하였습니다.

학생들 스스로 평소에 혐오표현을 혐오표현이라고 인식하지 못했었고,

무심코 지나쳤던 표현들에 대해 다시 한번 생각해 보는 계기가 되었다고 말한 부분에서 사회적 감수성을 기르는 계기가 되었다고 생각합니다.

[강사 성찰]

프로젝트를 시작할 때 혐오표현에 대해 전혀 모르거나 사용한 적이 없는 참여자들에게까지 혐오표현을 노출해야 부담이 있었습니다.

또한 교실안에도 소수자, 즉 혐오표현의 대상이 되는 참여자가 있을 수 있기 때문에 강사 스스로가 혐오표현을 사용하지 않도록 많은 노력을 기울여야 했습니다.

정체성에 대한 부분을 상대적으로 간단하게 다루었는데, 이 부분은 아쉬운 점으로 남아있습니다.

왜냐하면 정체성에 대해 올바르게 인식한 후에야, 혐오 표현의 문제를 자신의 문제로 인식할 수 있기 때문입니다.

강의를 준비하면서 개인적으로 자기반성의 시간을 많이 가지게 되었습니다.

이 프로젝트를 준비하는 강사 역시 차별에 대한 인식과 평등에 대한 감각을 높여야 한다고 생각합니다.

지금까지 대전시청자미디어센터의 송선영 강사였습니다.

PART 2. < 혐오 STOP 캠페인 > —김상은 강사

안녕하세요, 대전시청자미디어센터 미디어강사 김상은입니다.

두 번째 발표인 < 혐오 STOP 캠페인 > 미니캠프 발표를 시작하겠습니다.

첫째, 기획배경입니다.

출발점은 2021년도 디지털 시민성 강화 연구 프로젝트의 일환으로 시청자미디어재단 정책연구팀과 대전시청자미디어센터 프로젝트팀이 협업하여 < 청소년 주도 온라인 혐오 대항 프로젝트 > 교육과정 개발 연구를 진행하였고, 앞선 사례발표에서 들으신 바대로 대전지역 2개 중학교 자유학년제에서 시범운영 및 결과공유를 했습니다.

그 결과가 굉장히 의미있었기 때문에 저희는 어떻게 이것을 지속적으로 확장시켜 나갈 수 있을지 참 많이 고민했습니다. 그리고 그 고민의 결과가 미니캠프라고 보시면 됩니다. 이번에는 대전시청자미디어센터가 주축이 되어 기획하였고,

차별점으로는 미디어 제작 경험이 있고 미디어 리터러시 역량 증진에 관심이 있는 청소년을 대상으로 삼아, 학기 내 주어진 과제를 이수하는 개념보다는 주제 중심의 미디어 리터러시 활동 참여에 집중하도록 하자는 데 주안점을 두었습니다.

이것들을 조금 더 구체적으로 설명하기 위해서 먼저 자유학년제의 경우, 중1 자유학년제 직업탐구 선택 중 미디어 과목을 수강한 학생이 대상이고, 학교 교육과정 내 참여라는 수동 참여의 형태였으며, 미디어 제작경험이 전무한 학생들이 다수였고, 프로젝트형 수업(PBL)에 어색해했으며, 혐오 개념에 대한 인식이 부재했습니다. 또한 학교에 학급 당 20명 내외의 학생들을 1명의 강사

와 1 명의 보조강사가 지원되는 형식으로 운영되었습니다.

이런 운영의 (= 이전 자유학기제의) 한계점들을 캠페인에서는 많이 극복하고자 했고, 그래서 미니캠프는 만 18 세 이하 청소년으로 그 대상의 범위를 넓혔고, 기존 활동하는 미디어·사회문화·토론 동아리의 팀 단위 신청을 모집하여 운영했습니다. 그래서 교외 미디어 활동 참여라는 능동 참여의 형태를 띠었고, 미디어 제작에 능통한 학생들이 다수였고, 프로젝트 수업에 익숙했으며, 협오 개념과 해당 캠페인의 취지를 잘 알고 있었습니다. 그리고 책임강사가 있고 팀별 멘토가 매칭되는 그런 방식을 계획했습니다.

(이를 조금 더 쉽게 설명하면) 주축으로는 대전시청자미디어센터가 있고, 오정훈 센터장님의 지원 아래 담당과 기획을 김지훈 선임님이 맡아주셨고, 공동캠페인 진행을 위해 한편으로는 국가인권위원회, 다른 한편으로는 대전인권사무소를 협력 기관으로 체결했습니다. 2 명의 책임강사와 각 책임강사 별로 2 명의 멘토들, 그리고 멘토별로 각 팀이 매칭되는 구조입니다.

책임강사의 경우, 자유학기제 주장사로의 경험이 있기 때문에 그 노하우를 바탕으로 교육 및 기획 전반을 지도했고 멘토의 경우, 학생들의 니즈 needs 를 파악하고 제작과정활동에서의 어려움에 대해 즉각적으로 피드백하는 역할을 담당했습니다.

세부 운영을 보시면, 홍보영상을 만들어 SNS 에 게시해 홍보했고 그 결과 4 팀이 선정, 총 참여 인원은 20 명이었습니다. 5 주간 캠페인 프로젝트를 진행했고 매주 토요일 3 시간씩 운영했습니다. 결과물로는 팀 당 1 개의 캠페인 영상이 완성되었고, 확산방안으로는 대시미 청소년미디어페스티벌 캠페인 선포식을 시작으로 SNS 을 통해서 캠페인 결과물을 공유하도록 했습니다.

청소년들이 스스로 기획하는 활동이란 무엇인지 요약해보겠습니다.

첫째로는 문제 인식 단계입니다. 우리 사회에 혐오가 가득한데, 그 혐오가 무엇이고 왜 문제가 되는지를 인식하는 기획이 포함됩니다. 두 번째로는 미디어 제작 단계로, 올바르게 못한 혐오 표현들을 더 이상 쓰지 않도록 미디어를 활용하여 실질적인 캠페인 제작을 진행합니다. 보통은 여기서 끝이 나는데 저희는 마지막 단계로 실질적 행동을 이끌어내고자 했습니다. 온라인 혐오를 왜, 어떻게 막을 것인지에 대한 청소년들의 대처 방안을 공유하면서 세상에 선한 영향력을 미치는 방식을 유도했습니다.

1 차시에는 혐오 인식교육, 혐오란 무엇인지 어떻게 시작됐는지 등에 대한 공부를 했고

2 차시에는 혐오 캠페인 기획, 팀별로 어떤 콘텐츠를 제작할지 기획하고 논의했고요

3 차시에는 특강을 가져서, 김언경 (몽클 미디어인권연구소) 소장님을 모시고 보다 전문적인 시각에서 < 미디어 속 혐오와 가짜뉴스가 우리 삶에 미치는 영향 > 에 대해 살펴봤고, 각 팀별로 자

신들의 기획에서 어떤 부분이 부족한지 피드백 받는 시간을 가졌습니다.

4 차시에는 혐오 예방 관련 영상을 제작하며 실질적인 촬영을 진행했습니다. 사진은 각 팀이 촬영하는 모습들이고요

마지막 5 차시는 발표회 및 캠페인 선포식을 진행했는데, 청소년미디어페스티벌에서 온라인으로 생중계하기 위해 사전 녹화를 했습니다. 제가 사회를 보고, 학생들은 각자의 공간에서 자신의 콘텐츠를 소개하고 문제의식, 느낀점 등을 공유했습니다.

발표회와 교육과정은 여기서 종료되지만 혐오 캠페인은 지금부터 시작이라는 선포식을 거행하기 위해 제가 “혐오” 라고 외치면 학생들이 “멈춰” 로 응답해주는 부분이 지금 보는 장면입니다.

지금 발표에서 각 팀이 만든 작품을 보지는 못하지만 유튜브에 영상이 공유되어 있습니다.

(이미지 보이는 순서대로) 동방여자중학교, 대성여자고등학교, 대전외국어고등학교, 동대전고등학교의 영상을, 관심 있는 분들이라면 봐주시면 참 좋을 것 같습니다.

참여했던 친구들에게 이렇게 수료증을 발급하기도 했습니다.

마지막으로 시사점입니다. 이 부분이 핵심이자 발표의 마지막이 될 텐데요, 크게 3 가지로 간단히 정리하고 마무리 하겠습니다.

첫 번째는, 미래 미디어 생산자가 될 청소년의 미디어 주체성을 확립할 수 있었다는 점입니다. 미디어를 통해 사회문제를 알고 또 미디어 제작을 통해 그 (사회) 문제들을 극복해내는 과정을 통해 학생들의 자존감은 향상되었습니다. 또한 청소년의 생각과 목소리는 참 중요한데요, 이것들을 창의적인 기획으로 다듬어보는 기회가 되었다는 점이 성취점이라 볼 수 있겠습니다.

두 번째는 만들며 배우는 미디어 리터러시 활동을 본격적으로 할 수 있었다는 점입니다. 우리 사회의 혐오 문제를 제대로 인식하고 그것의 심각성에 대해 정리할 수 있는 시간을 확보할 수 있었고, 이론과 제작이 분리된 영역이 아니라 이론이 제작을 위한 (즉, 주제를 이해하기 위한) 필수적인 작업이라는 것을 깨닫게 해주었습니다.

세 번째는, 어쩌면 이것이 가장 중요한 발견 지점이었는데, 한편으로 청소년 세대는 온라인 혐오를 가장 열심히 생산하고 있는 세대이기도 합니다. 그러나 다른 한편으로, (저희와 같은 활동을 통해서) 온라인 혐오에 대항하는, 같은 세대 내에서도 또 다른 주체로서의 가능성을 확인할 수 있었다는 점이 참 소중한 점입니다. 이런 부분들이 청소년 세대 내에서 자정작용을 일으켜 궁극적으로는 미래의 민주 시민을 양성하는데 도움이 되리라는 것을 체감할 수 있는 기회였고, 저희는 앞으로도 이런 활동들을 쭉 이어나갈 수 있도록 할 계획입니다.

제 발표는 여기까지입니다. 들어주셔서 감사합니다.

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、050-061

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

学校の内外のヘイトに対抗する 青少年が主導するオンライン嫌悪対抗プロジェクト 自由学期制から「嫌悪STOP」キャンペーンまで

ソン・ソンヨン キム・サンウン

PART 1. 自由学期制—ソン・ソンヨン

皆様、こんにちは。大田視聴者メディアセンター講師、ソン・ソンヨンと申します。

様々なメディアから、私たちは時々好ましくない書き込みや場面を目にする場合があります。特にオンライン上で多いのが嫌悪表現です。

このプロジェクトに参加した理由は、コロナパンデミックにより、さらに酷くなっている嫌悪感情と嫌悪表現が社会的な葛藤を煽る状況となっているからです。

それは嫌悪表現がオンライン上でメディアを通じて簡単に素早くウイルスのように広がっていたからです。

そのため私たちは、特にメディアに多く接している青少年に、嫌悪表現の根絶と対抗するための教育がどうしても必要であると考えました。

このプロジェクトは、視聴者メディア財団の政策研究チームが企画・開発しており、大田視聴者メディアセンターで行いました。



[研究及び準備過程]

4月のワークショップで嫌悪の概念を理解し、学校内嫌悪現象の実態と対策特別講義を聞きながら、講師の能力を強化する時間を設けました。

その後、完成した授業案に基づき、学校の状況に合わせて適用し、5月から教育を開始することができました。

2021년도 디지털 시민성 강화 연구 프로젝트 <청소년 주도 온라인 혐오 대항 프로젝트>	
4월 1차일 워크숍 및 전문가특강	온라인 혐오 이해
	프로젝트(PBL) 수업 이해
	커리큘럼 개발
5월	각 학교 프로젝트 시작
6월	프로젝트 마무리

[教育目標]

このプロジェクトの目標は、青少年たちがオンラインメディアに登場する嫌悪表現を認識し、それに対抗できるプロジェクトを主導的に行い、デジタル市民性を育成することです。

교육목표

- 혐오표현에 대해 이해하고 사례와 문제점을 말할 수 있다.
- 온라인 혐오표현에 대항하는 콘텐츠를 제작하고 디지털 시민성을 기를 수 있다.

[プロジェクト過程]

中学1年生を対象に計5回のオン・オフラインで授業を行いました。映像とラジオコンテンツ制作に関心が高い学生で構成されたクラスです。生徒はメディアの受容者であり、生産者にもなります。そのため、青少年に望ましいデジタル市民性の必要性を強調する授業が行われました。

프로젝트 과정

혐오에 대해 생각하기
고충관념, 편견, 혐오란?

혐오 대항 콘텐츠 제작하기
혐오표현 대항방법 생각하기
컨텐츠 기획, 제작

#혐오표현멈춰
혐오에 대항하기
편파언, 영상 상영회, 소감담표

[回数別の教育課程]

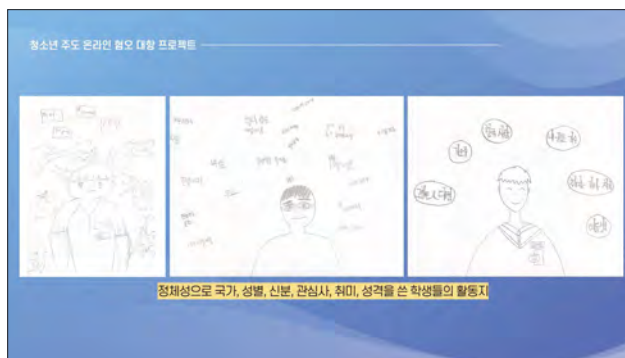
教育内容を詳しく紹介いたします。

第1次課程では、主にアイデンティティの概念の教育を行いました。

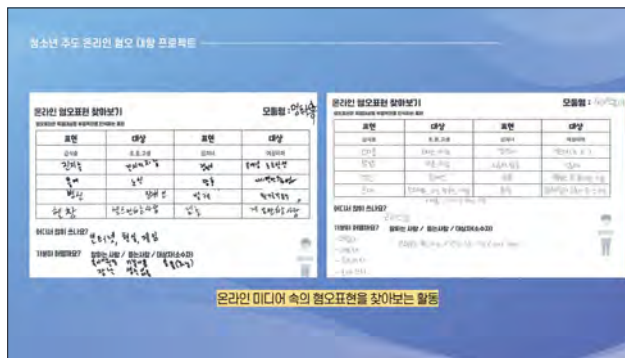
他人の個性と多様性を尊重し、嫌悪表現のような社会問題は、自分にも密接な関連があると認知できるようになることを目標としました。

교육차시	교육내용
1차시	정체성, 고정관념, 편견, 차별 개념 이해, 혐오 표현 이해
2차시	온라인 혐오 표현 대응 방법 설계하기
3차시	콘텐츠 제작 1 - 기획서 구성
4차시	콘텐츠 제작 2 - 촬영과 편집
5차시	작품 감상 및 소감 발표

参加者たちは自分のアイデンティティを表すように、生まれた国、性別、身分などの内容を書きました。客観的な情報の以外にも、自分の関心事、趣味、性格も自由に書きました。この内容をもとに、講師は参加者が考えている、自分を取り巻く固定観念、差別、偏見について質問しました。



例えば、「私は韓国生まれですが、これは私が選択できることではない。ところが、アジア人という理由で差別をされたら？」という質問や、「皆さんが学校の生徒だという理由だけで（韓国で生徒を卑下する表現）給食虫と言われた場合、どんな気分になりますか？」のような質問を通して、参加者自らがこの問題について深く考えてみるきっかけを設けました。



さらに、少数者に対する否定的な認識や差別、敵対的表現が嫌悪表現であることを認知できるようにしました。その後、嫌悪表現の対象者について話し合いました。

第2次課程では、嫌悪表現が社会的分裂と暴力を煽りかねない点と、嫌悪表現の形式について考えてみました。参加者に悪意のない嫌悪表現まで、否定的に受け取るべきかについて問題を提起し、嫌悪表現への対抗方法を討論しました。



下の左側の画像は、韓国のある高校の卒業写真ですが、ブラックフェイスに扮装しています。ブラックフェイスは、黒人ではない俳優が顔を黒く色を塗り、唇を誇張して表現する扮装です。これは人種差別的な行為であると批判されました。

右側の写真は、2018年のロシアワールドカップの際に、メキシコのサッカーファンがSNSを通して感謝の気持ちを伝える写真です。ところが、東洋人に対して「目を開けろ」と嘲弄したことが、相当な論争になりました。

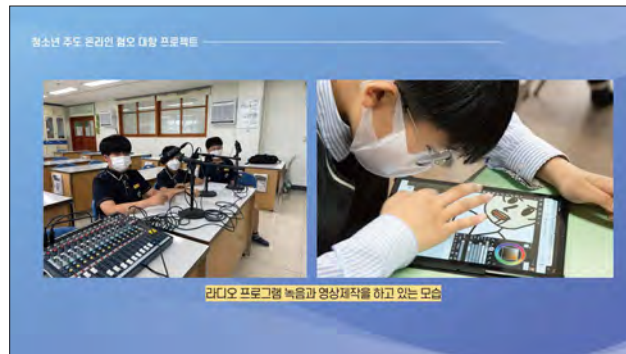


二つの例では、悪意がなかったとしても無知による言動が人を傷つけることがあること、また、特定対象への嫌悪表現になり得ることについて考えてみました。また無意識にこのような表現を使っているのではないかと思いました。

このように2次課程では、嫌悪表現の危険性について参加者に警戒心を与え、参加者にとっては他人の多様性を尊重することの大切さを理解する契機となりました。

第3～4次課程は、参加者達が直接シナリオを書き、コンテンツを作りました。

この過程によって、参加者が他人に対する態度について深く考えてみる様子をうかがうことができました。



청소년 주도 온라인 혐오 대응 프로젝트

프로젝트 결과물

팟캐스트 제작

구분	내용 및 특이사항
1호 (3편)	혐오란 혐오물란, 게이내키 / 대상 : 남성 동성애자
2호 (3편)	혐오란 혐오물란: K-정신 / 대상 : 초등학교 정도의 어린이
3호 (3편)	혐오란 혐오물란: 콘대 / 대상 : 권위적인 사고의 예민
4호 (3편)	혐오란 혐오물란: 뽕학 / 대상 : 노인
5호 (3편)	혐오란 혐오물란: 남우 / 해당 조는 미디어 제작 관수 대상
6호 (3편)	혐오란 혐오물란: 노금마 / 대상 : 상대방의 예민나 / 여성
7호 (3편)	혐오란 혐오물란: 노금마 / 대상 : 상대방의 예민나 / 여성
8호 (3편)	혐오란 혐오물란: 한남 / 대상 : 한국남성

청소년 주도 온라인 혐오 대응 프로젝트

프로젝트 결과물

영상 콘텐츠 제작

구분	내용 및 특이사항
1호 (4편)	혐오란 혐오물란: 뽕산, 뽕산, 군대 / 형사 : 혐오란 영상
2호 (4편)	혐오란 혐오물란: 인종차별 / 형사: 해니콜이신
3호 (4편)	혐오란 혐오물란: 뽕학 / 형사: 도금마
4호 (4편)	혐오란 혐오물란: 한남 / 형사: 도금마
5호 (5편)	혐오란 혐오물란: 뽕산 / 형사: 도금마

[参加者を省察]

参加者は当教育以降に、嫌悪表現についてより正確に認識できるようになったとの反応を見せました。また、オンライン上で嫌悪表現を目にした場合は、論理的な反論をしようという意志を見せました。



[プロジェクトの省察]

プロジェクト以降、参加した研究員たちと面談によって得られた省察についてまとめました。参加者は嫌悪表現によって、社会構造的に与える影響について自ら説明することができました。また、嫌悪表現を規制したり統制するより、自ら調節できる自己調節能力が必要とされており、教室や社会的雰囲気嫌悪表現と接して、興味をみせるより、気分が悪くなるような雰囲気作りが必要であることに共感しました。

生徒自らが普段から嫌悪表現を嫌悪表現として認識できなかったこと、軽々しく表現したことについて、もう一度考えてみるきっかけになったと表現していることがわかり、社会的感受性を支えるきっかけになったと考えています。



[講師の省察]

プロジェクトのスタート段階では、嫌悪表現について全く知らなかったり、使ったことのない参加者にまで嫌悪表現を見せることに負担がありました。

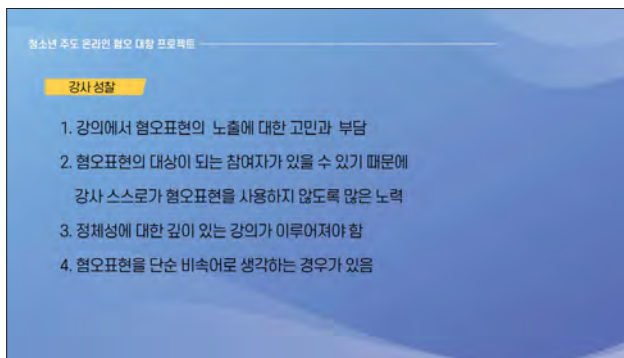
また、教室の中にも少数者、つまり嫌悪表現の対象となる参加者もあり得ますので、講師自らが嫌悪表現を使わないための努力をする必要がありました。

アイデンティティ部分については、相対的に軽く扱っているような部分は残念な気がします。

なぜなら、アイデンティティについて正しく認識しなければ、嫌悪表現の問題を自分の問題として認識することができないからです。

講義の準備過程で、個人的に自己反省の機会になりました。

このプロジェクトを準備する講師も差別に対する認識や、平等に対する感覚を高めなければならぬと思います。



ここまで大田視聴者メディアセンターのソン・ソンヨン講師からの発表でした。

PART2. <嫌悪STOPキャンペーン>—キム・サンウン

皆さんこんにちは。大田視聴者メディアセンター・メディア講師のキム・サンウンと申します。第二番目の発表、「嫌悪 STOP キャンペーン」ミニキャンプの発表を始めさせていただきます。



まず、企画背景を申し上げます。

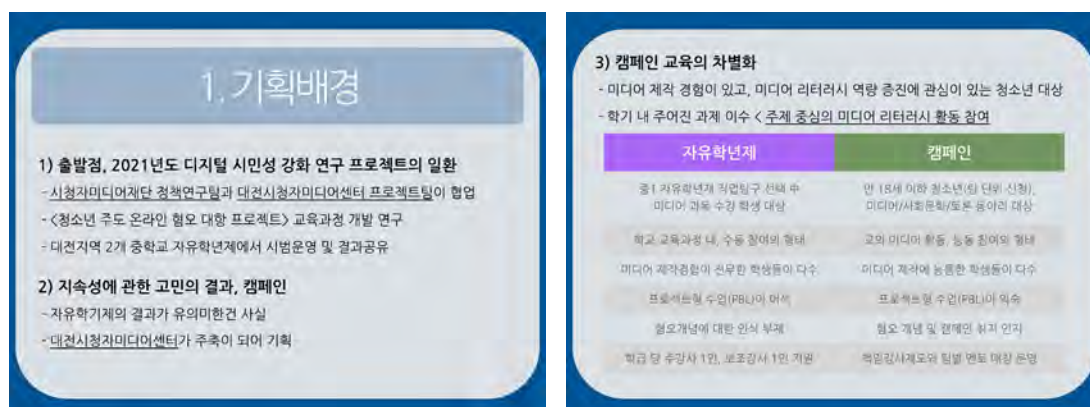
出発点は、2021年度デジタル市民性強化研究プロジェクトの一環として、視聴者メディア財団政策研究室と大田視聴者メディアセンタープロジェクトチームが協働し、「青少年主導オンライン嫌悪対抗プロジェクト」教育課程開発研究を行い、先ほどの事例発表の通り、大田地域の2つの中学校の自由学年制において師範運営や結果共有を行いました。

その結果、非常に有意義でありましたので、これを持続的に拡大していける方法に関して色々工夫しました。その工夫の結果がミニキャンプです。今回は大田視聴者メディアセンターが主な軸になって企画しました。新しい点として、メディア制作経験があり、メディアリテラシー能力アップに関心のある青少年を対象にしており、学期内に与えられた課題を履修する概念より、主にテーマ中心のメディアリテラシー活動への参加に集中できるように図りました。

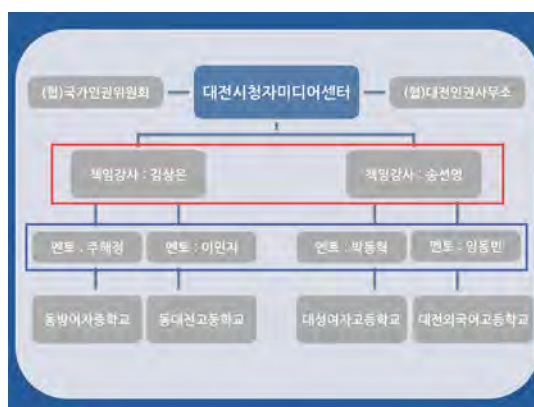
もう少し具体的に説明します。まず自由学年制の場合、中1自由学年制の職業探求を選択する際に、メディア科目を受講した学生を対象にしています。学校教育課程内では参加の形態が受動的なものなので、生徒はほとんどメディア制作経験がありませんでした。そのためプロジェクト型授業（PBL）に違和感があり、嫌悪概念に対する認識がありませんでした。また学校ではクラスあたり20名前後の生徒に対して一人の主講師と1人の補助講師がサポートする形式で運営されました。

このような運営の（＝以前の自由学期制の）限界などをキャンペーンではできるだけ克服したいと思い、ミニキャンプでは、満18歳以下の青少年まで対象の範囲を広げており、現在活動しているメディア・社会文化・討論サークルのチーム単位で申し込む形で募集・実施しました。そし

て、校外メディア活動参加という能動的な参加の形態をとりました。メディア制作に精通した生徒が多数だったため、プロジェクト型の授業に慣れており、嫌悪概念と当該キャンペーンの趣旨をよく理解していました。また、責任講師がいるのでチーム別のメンターがマッチングできるような方法で計画しました。

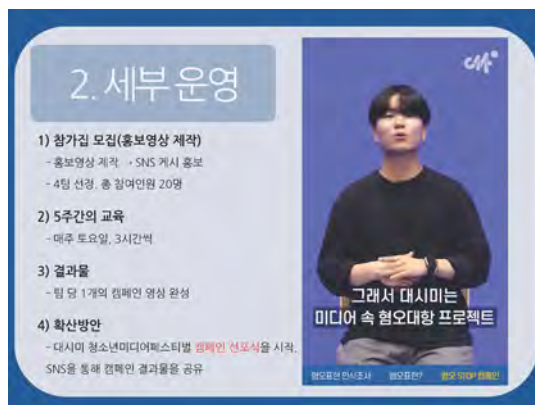


もう少し簡単に説明しますと、主な軸としては、大田視聴者メディアセンターがあり、オ・ジョンフンセンター長からのサポート下で、キム・ジフン選任が担当と企画を担当しました。そして共同キャンペーンを行うため、国家人権委員会や大田人権事務所を協力機関として提携しました。2人の責任講師と各責任講師ごとに2人のメンター、そしてメンター別に各チームがマッチングされる仕組みです。責任講師の場合、自由学期制のメイン講師としての経験があり、そのノウハウを基に教育および企画全般を指導しており、メンターの場合、生徒のニーズを把握して制作課程活動での困難について直ちにフィードバックする役割を担当しました。

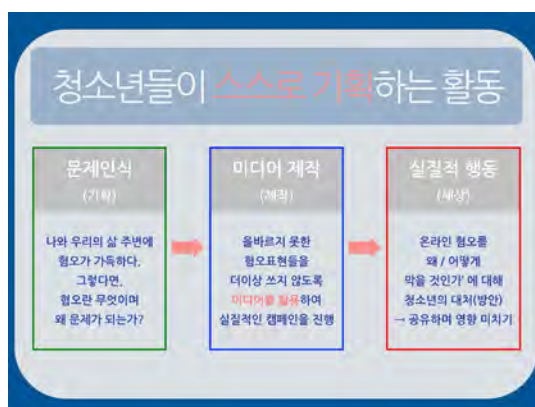


細部の運営は、広報映像を作って SNS に掲示しました。その結果、4チームが選定され、参加人数は計 20 人でした。5 週間のキャンペーンプロジェクトを実施し、毎週土曜日に 3 時間ずつ実施しました。結果としては、1 チームあたり 1 つのキャンペーン映像が完成できました。拡散方法としては、大田視聴者メディアセンターの青少年メディアフェスティバルキャンペーン宣布式を皮切りに、SNS を通じてキャンペーンの結果を共有できるようにしました。

青少年たちが自ら企画する活動について要約して説明します。



第一は、問題認識段階です。社会に嫌悪感があふれている中、どのような嫌悪感があって、なぜ問題になるかについて認識する企画段階です。第二は、メディア制作段階ですが、正しくない嫌悪表現を以後使わないよう、メディアを活用して実質的なキャンペーン制作を行います。普通はここまでで終了するケースが多いのですが、当センターでは、最後の段階として実質的な行動に結びつけることを試みました。オンライン上の嫌悪表現を防止のための活動をする理由や防止方法について、青少年から対処方法を共有し、世の中に善良な影響力を与えられるように誘導しました。



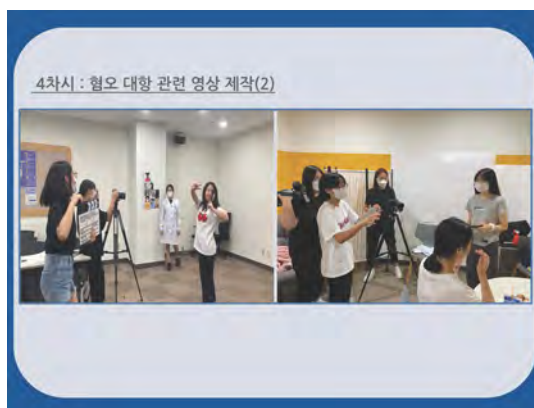
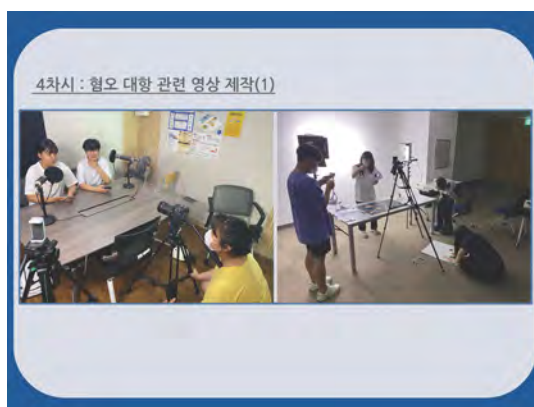
詳しく申し上げますと、第1次では、嫌悪認識教育、嫌悪とは何か、どうやって始まったのか、などについて研究しており、第2次の課程では、嫌悪キャンペーンの企画、チーム別にコンテンツ制作の種類などについて企画や議論を行いました。



第3次では、特別講義を行い、キム・オンギョン（ムンクルメディア人権研究所）所長をお招きして、より専門的な視点での「メディアの中の嫌悪とフェイクニュースが私たちの日常生活に及ぼす影響」について考えてみました。チーム別に自分たちの企画で足りない部分やそれを補うために、相互フィードバックする時間をもうけました。



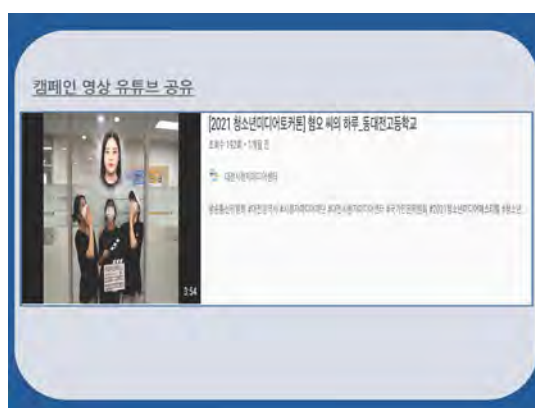
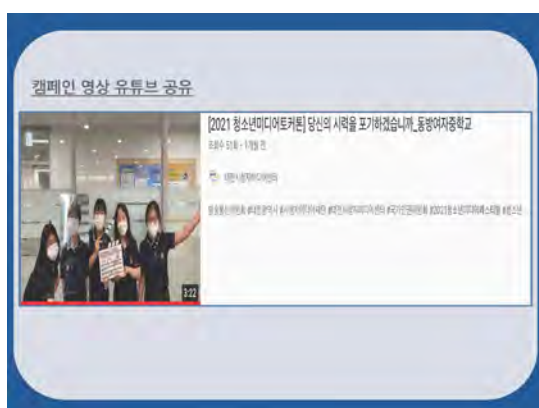
第4次では、嫌悪予防関連映像を制作し、実際に撮影も行いました。下の画像は各チームが撮影している姿です。最後の第5次では、発表会及びキャンペーン宣布式を行い、青少年メディア・フェスティバルをオンラインで生中継するために事前録画を行いました。私が司会を務め、各チームの生徒たちは各自の空間で自分のコンテンツを紹介し、問題意識や感じた点などを相互共有しました。



発表会と教育課程は終了しますが、嫌悪キャンペーンはこれからが本当の始まりであることを
 宣布式で確認するために、私が『嫌悪』と大きな声で先唱し、学生たちが『STOP』と答える場面が、
 下の画像です。



本日の発表では、各チームが作った作品は見られませんが、YouTube に動画を共有しています。
 画像の順番通り、東方女子中学校、大成女子高校、大田外国語高校、東大田高校の生徒が制作し
 た映像です。ご関心のある方はご覧いただければ幸いです。



参加者には修了証を発給しました。

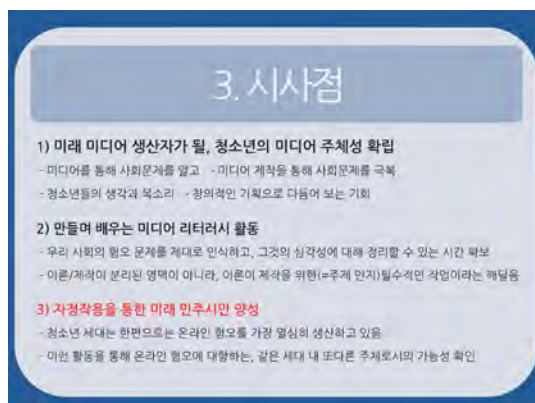


3番目は示唆された点です。もっとも大事な点を整理します。大きく3つに分けて簡単にまとめました。

第一は、未来のメディアの生産者となる青少年のメディア主体性が確立できたことです。メディアによって社会問題を読み取り、またメディア制作を通じて（社会）問題を克服する過程で生徒の自尊心を向上させることができました。さらに青少年の考えや意見は大変重要ですが、これらを創意的な企画によって再考察の機会になったことも成果です。

第二は、自ら制作しながら学べるメディアリテラシー活動を本格的に行ったことです。韓国社会の嫌悪問題をしっかりと認識し、その深刻性についてまとめてみる機会が確保できた点、理論と制作を別の領域と考えるのではなく、理論こそ制作のための（すなわち、主題を理解するための）必須的な作業であることを認識させてくれました。

第三は、これこそ最も重要な発見事項ですが、青少年世代はオンライン嫌悪を最も力を入れて生産している世代であると同時に、オンライン嫌悪に対抗する、全ての世代の中でも、特別な主体としての可能性を確認できたことは大変重要なことだと言えます。このような活動は、青少年世代内で自浄作用を起こし、究極的には未来の民主主義的な市民の養成に役立つということを体感できる機会でした。当センターではこれからも弛まずこの活動を続ける計画を持っております。



以上で私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、062-068

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

スマートニュースによる新たな試み： 学校現場で、クリティカル・シンキングのスキルを伸ばす

山脇岳志

スマートニュース メディア研究所

こんにちは、山脇岳志と申します。

本日は「スマートニュースによる新たな試み：学校現場で、クリティカルシンキングのスキルを伸ばす」というテーマで、10分ほどお話をさせていただきます。

まず、簡単に自己紹介を致します。

私は、1964年、前回の東京オリンピックの年に生まれました。34年間、朝日新聞社で仕事をしてきましたが、その間に2度、アメリカで勤務をしました。2度目はアメリカ報道の責任者として、トランプ氏が大統領に当選した選挙をカバーしました。

コラムを書く編集委員などを経験した後、メディアリテラシー教育やメディア研究をやりたくて、スマートニュースメディア研究所に転職。現在、研究主幹を務めております。

山脇岳志 (やまわき・たけし)

1964年 兵庫県出身。

1986年 朝日新聞社に入社。事件事故、地方行政調査報道、経済担当（大蔵省、日銀、IT関係など）

1995～96年 オックスフォード大学客員研究員

2000～2003年 ワシントン特派員（経済担当）

2003～2006年 論説委員

2007～2012年 GLOBE創刊、編集長に

2012～2013年 ベルリン自由大学上席研究員

2013～2017年 アメリカ総局長（大統領選カバー）

2017～2020年 編集委員としてコラム執筆後、退職

2020年4月～スマートニュースメディア研究所 研究主幹

2021年4月～京都大学経営管理大学院特命教授



スマートニュースは、韓国ではあまり知られていないかもしれませんが、日本においては、ユーザー数ではトップの「日本最大のニュースアプリ」として知られています。



3000もの提携媒体から多様なコンテンツの提供を受け、政治や経済などのニュース以外にも多彩な趣味の情報を扱うチャンネルが1000以上あります。

スマートニュースは様々な新聞社や雑誌社などの媒体と契約して、情報を受け取り、それをキュレーションしてユーザーにお届けする、というビジネスモデルです。ユーザーは無料でアプリをダウンロードして使うことができ、広告収入でビジネスを組み立てています。

設立は2012年と、歴史の新しい会社です。まだできて9年ですが、急成長していて、社員数は現在500人近くいます。未上場で時価総額10億ドル以上の企業をユニコーンといますが、日本に数少ないユニコーン企業の1つです。

スマートニュースメディア研究所は、スマートニュース株式会社の一部ではありますが、独立性があって、収益事業は行っていません。「ニュースやメディアが本当に人々のためになっているのか」などをテーマに、メディアリテラシー、メディア研究、ジャーナリスト支援などを行っています。



では、本日のテーマである、メディアリテラシーについて簡単にお話します。

「メディアリテラシー」とは？

●多義的な言葉 (さまざまな定義がある)

広義のメディアリテラシーは、情報リテラシー(情報の真偽を見極める)、ニュースリテラシー、デジタルリテラシーなどを含んでいる。

●狭義のメディアリテラシー

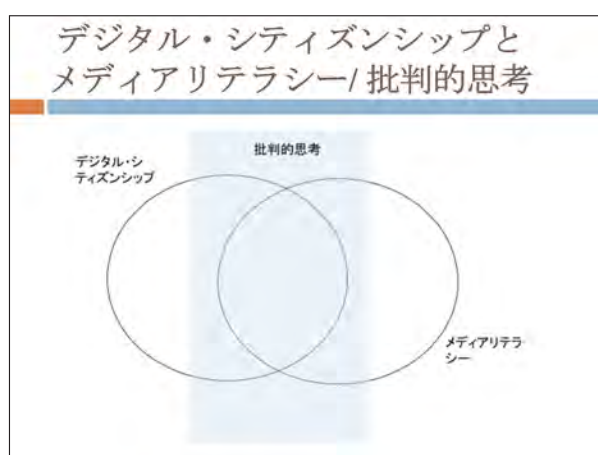
「民主主義社会におけるメディアの機能を理解するとともに、あらゆる形態のメディア・メッセージへアクセスし、**批判的に分析評価し、創造的に自己表現し、**それによって**市民社会に参加し、異文化を超えて対話し、行動する能力**」
坂本旬・法政大学教授(2020)

広義のメディアリテラシー-概念図

メディアリテラシーという言葉は、様々な定義のある、多義的な言葉だと思います。大きく言うと、広義のメディアリテラシーと、狭義のメディアリテラシーがあると考えています。広義のメディアリテラシーは、情報リテラシー(情報の真偽を見極めるようなリテラシー)や、ニュースリテラシー、デジタルリテラシーなどを含んでいます。

狭義のメディアリテラシーは、法政大学・坂本旬教授の定義を借りれば、「民主主義社会におけるメディアの機能を理解するとともに、あらゆる形態のメディア・メッセージへアクセスし、批判的に分析評価し、創造的に自己表現し、それによって市民社会に参加し、異文化を超えて対話し、行動する能力」ということになります。これは国際的なメディアリテラシーの定義に沿っている、と思います。

次に、メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップ、そしてその根幹にあるクリティカルシンキングについて、ごく簡単に整理したのがこの図となります。



デジタル・シティズンシップとメディアリテラシーはかなり重なっている部分が多いと思うのですが、その両方にまたがる形の基礎として、クリティカルシンキングは非常に重要だ、と思います。そもそも、クリティカルシンキングとはなんなのか。この言葉も多義的です。この分野の日本


における第一人者である京都大学の楠見孝教授の定義に従えば、1つ目に「論理的・合理的な思考」、2つ目に「自分の推論プロセスを意識的に吟味する内省的、熟慮的な思考」、3つ目が「よりよい思考を行うための目標思考的思考」となっています。

批判的思考（クリティカル・シンキング）とは？

「非難する」ことではない。むしろ
「吟味する」こと。

楠見孝・京大教授の「批判的思考」の定義

- 1) 論理的・合理的な思考
- 2) 自分の推論プロセスを意識的に吟味する内省的(reflective)、熟慮的な思考
- 3) よりよい思考を行うための目標思考的思考



京都大学大学院教育学研究科
長・教育学部長
楠見 孝 氏

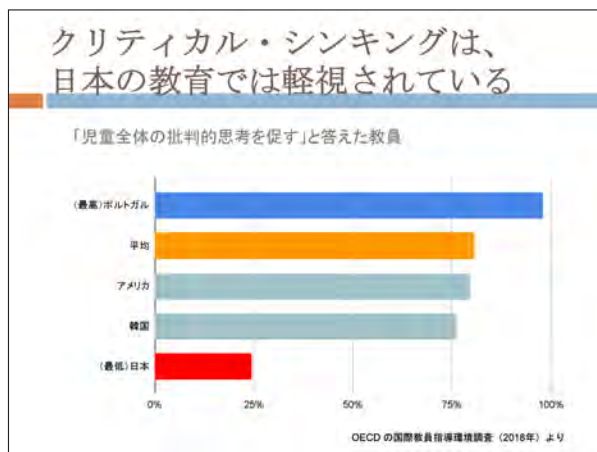
もう少し分かりやすく解説します。

クリティカルシンキングの「クリティカル」は、ギリシャ語の見分ける、判断すると言う意味を表す「クリティコス (kritikos)」が語源で、「安易に鵜呑みにしない」「常識や思いこみにとらわれない」「議論の前提も含めて問い直す」ということだと思います。

日本では、「批判的」というと、人を「批判」したり「非難」したりするネガティブな意味にとられがちですが、国際基督教大学の生駒夏美教授は「自ら考えた結果、否定するだけでなく肯定することもクリティカルシンキング（批判的思考）」としています。

この言葉は、大事なことを伝えていると思います。

日本では、クリティカルシンキングは重要視されておらず、OECDの国際教員指導環境調査(TALIS) 2018年報告書で、(授業において)「生徒の批判的思考を促す」と答えた中学校教員は、参加48カ国平均では8割くらいだったのですが、日本では2割台にとどまりました。



韓国の先生たちの75%以上は、(授業で)クリティカルシンキングを促しているようです。一方、日本はそうではない。ここをなんとかしたいな、と我々は考えているところです。

では、スマートニュース メディア研究所でメディアリテラシーについて、具体的にどんな取り組みをしているのか、についてご紹介します。授業実践例、オンラインゲーム教材、出前授業、論考、書籍と主に5点あります。

教育現場に	全ての人に
1、授業実践例	4、論考 (HP)
2、オンラインゲーム教材	5、書籍
3、出前授業	

まず、授業実践例について。研究所のウェブサイトに、無料でダウンロードできる教材を載せています。クリティカルシンキングの育成にフォーカスしたような教材を取り上げています。

: https://smartnews-smri.com/literacy_category/practice/



2つ目は、SNSでの情報受発信について考えるオンラインゲーム教材を開発しました。中学生～大学生を対象としています。

フェイクニュースと真実のニュースを見分けながら、シェアするかしないかを考える教材です。教育機関向けに無償で提供しています。

: <https://smartnews-smri.com/literacy/literacy-468/>



3点目は、出前授業です。研究所員が中学や高校、大学へ出かけて行って、無償でメディアリテラシーの授業を行なっています。最近はコロナの影響で、なかなか学校に行けなくてオンラインでもやることもあります。社会と学校をつなぐというコンセプトで行なっています。

: <https://smartnews-smri.com/literacy/demae-casestudy/>



4点目として、ウェブサイトにはさまざまな学者などの専門家・ジャーナリストの方々の論考を掲載しています。ここで、概念からして複雑なメディアリテラシーについて、読者の方々に理解を深めていただくようにしています。

: https://smartnews-smri.com/literacy_category/interview/

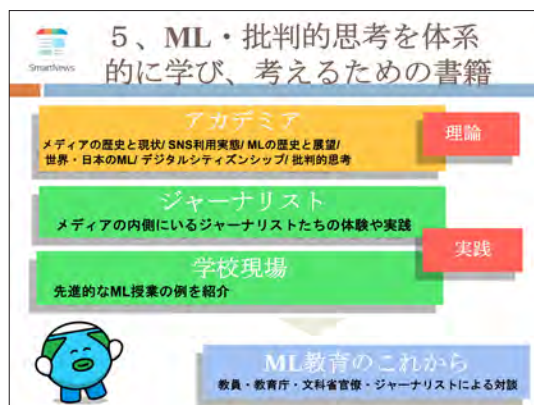


最後に、5点目として書籍を今準備しております（当時）。

メディアリテラシーの分野では、研究者の方々が、多くの立派な本を出版されています。また、ジャーナリズムやメディアの激変ぶりや問題点について伝える本もたくさんあります。

ただ、お互いの世界が分断された感じがありました。

これら二つの世界をブリッジする、両方にまたがるようなメディアリテラシーの理論と実践が網羅されたテキストブックを、坂本旬教授と私が編者となって、編集・執筆しているところです。



2021年12月末に時事通信社から刊行される予定です。日本におけるメディアリテラシー入門の画期的な本にできれば、と願っています。

： <https://bookpub.jiji.com/book/b597275.html>

以上が研究所の取り組みの概要となります。

今の社会は、ご存知のように、虚偽ニュースやデマが広がりやすい世界です。

ソーシャルメディアは便利で良いこともたくさんありますが、一方で、デマが急速に広がったり、人を傷つける情報が、あっという間に多くの人に伝わってしまう。そのことによって傷つく人もいたり、場合によっては自殺するような方も出てくる。

このような社会において、情報をしっかり吟味する、それをシェアするかどうか立ち止まって判断する、メディアリテラシーやクリティカルシンキングの力はますます重要になってきていると思います。

我々は、小さなシンクタンクですが、日本で少しでもクリティカルシンキングを育む教育が広まるように微力を尽くしたいと考えています。

韓国の皆様とも、もしも一緒に何か取り組めることがあれば、ぜひ一緒に取り組みたいと思っています。

本日はご清聴いただき、ありがとうございました。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、069-073

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

デジタル・シティズンシップのメディアリテラシー 日本の学校における学習実践

今度珠美

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員

本稿では、日本の学校におけるデジタル・シティズンシップのメディアリテラシーについての学習実践を報告する。

私は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの客員研究員としてデジタル・シティズンシップの研究をしている。また、鳥取県教育委員会の講師として、年間150校近い学校を回り、デジタル・シティズンシップとメディアリテラシーの授業実践を行っている。その日々の実践から、幼稚園、小学校、中学校の事例を報告する。

1. メディアリテラシーの役割

デジタル・シティズンシップの定義は、国際工学教育学会が次のように定義している。

「生徒は相互につながったデジタル世界における生活、学習、仕事の権利と責任、機会を理解し、安全で合法的倫理的な方法で行動し、模範となる」⁽¹⁾

デジタル・シティズンシップには、2016年、メディアリテラシーが包摂された。その経緯には、次のような社会的背景があった。

2016年当時の米国は、大統領選挙を機に「フェイクビジネス」が出現し、多くのデマや陰謀説、ヘイトスピーチがメディアに登場した。フェイクニュースサイトはクリック数などで多額の収入を得た。これらの事象は、社会の分断を招き、民主主義の根幹を揺るがしかねないと多くの教育者、メディア関係者も危惧するところとなった。若者の政治参加が注目され、リアルでも対面でも同じ価値観の人とのみ交流する状況が強まる中、寛容さを学び、多様な考えの人と議論する場を教育現場に作ることが急務ではないかとされた。

このような経緯から、デジタル・シティズンシップにメディアリテラシーが包摂された。

デジタル・シティズンシップの中で、メディアリテラシーは、「現実社会の諸課題と向き合う上で、どのようなメディアの特性をどのように理解するか、ソーシャル・メディアにおけるメッ

セージやアルゴリズムの批判的読解と創造者としての責任を学ぶ」役割を果たすようになった。では、デジタル・シティズンシップ教育ではどのような実践を行なっているのか、簡単に紹介する。

2. コモンセンスエデュケーション

米国には、著名なデジタル・シティズンシップ教育の教材がある。「コモンセンスエデュケーション (Common Sense Education)」である⁽²⁾。2020年には、米国の60,000以上の学校に勤務する60万人以上の教育者が本教材を利用した。本教材は、ハーバード大学大学院の研究機関Project Zeroが2010年より研究、開発した教材である。幼稚園児から高校3年生までを対象とし、6領域のテーマをカバーするように作成されている。(表1)

表1 コモンセンスエデュケーション 6領域のテーマ

1.	メディアバランス
2.	プライバシーとセキュリティ
3.	デジタル足あととアイデンティティ
4.	対人関係とコミュニケーション
5.	ネットいじめとオンラインのもめごと
6.	ニュースとメディア・リテラシー

3. 幼稚園での実践

アメリカでは、デジタル・シティズンシップ教育は幼稚園から学ぶ。日本の幼稚園で、「オンラインの約束」という学習を行っている。(図1)



図1

まず、具体的な事例を挙げ、インターネットを活用することで、できることや創造的な活用の可能性が広がることを確かめる。その上で、オンラインを安全に利用するための3つの約束を考える。1つ目は、利用にあたっては大人に聞いてから使うこと。2つ目はインターネットで話

す相手は知っている人だけということ。3つ目は子どもが見てもいいところだけを見ること。この3つの約束を教え、その理由を考えるという流れで進める。

4. 小学校での実践

小学校低学年、中学年では、「オンラインの約束」と合わせ、「デジタルにのこる足あと」についても学習する。インターネットに残してもいい足あと、残してはいけない足あとについて整理し、その理由を考える、という学習である。創造的活用を阻害しないよう、やってはいけないことだけではなく、やっていいことも学ぶことが特徴である。

「テクノロジーを使うとどんな気持ち？」という学習も行う。インターネットを利用していると嫌な気持ち、悲しい気持ちになることがある。そのような時、「ひとやすみ」「かんがえる」「たずねる」の3つのステップを通して行動することを知る。1つ目のステップ「ひとやすみ」。これは、今、自分の気持ちがどんな気持ちなのか、自分の気持ちが分かるまで待つ。2つ目のステップ「かんがえる」。これは、自分の気持ちがわかったら、何をしたらいいか、何がしてほしいのかを考える。3つ目のステップ「たずねる」。これは、困ったら大人の人に尋ね、助けてもらう。このように、3つのステップで行動する方法を学んでいく学習である。

小学校高学年になると、メディアリテラシーも扱う。(図2) 例えば「信頼できるニュースを探す」という学習では、バイアスについて考える。バイアスとは、自身の思い込みや無意識の偏ったものの見方のこと。そして、あるものを他のものよりも不公平な方法で好むことを言う。「私たちにバイアスがある、自分の思い込みで情報を見ている」ことを知り、その上で、情報を見極める時には「注意深く読むこと」「情報源を分析すること」「裏付けとなる情報を探すこと」の3つのステップで情報を読み解くことを学ぶ。最近の事例としては、ワクチンデマなどを取り上げることがある。新型コロナウイルスのワクチンに関しては、さまざまなデマ情報がインターネットに流れている。こういった事例をもとに、先程の3つのステップを通して、信頼できるニュースを探していく。思い込み、先入観で情報を見ていないか、自身のバイアスについても考える。



図2 小学校での学習の様子

メディアリテラシーの授業では、「情報を見極める」ことを学ぶ学習はこれまでも行われてきたが、「自身にはバイアス（思い込み）があり、そのバイアスを通して情報を見ている」という視点を学ぶ学習は、多くはなかった。思い込みについて考える学習は、保護者の感想でも「自分自身も考えさせられた」など好評であった。

5. 中学校での実践

中学生は、さらにメディアリテラシーについて考えを深める。例えば フィルターバブルやエコーチェンバー、確認バイアスなどをテーマとして取り上げる。中学生は、授業中のやりとりの中でも、自分が見たい情報だけを見ることが多いと話し、対面でもオンラインでも、自分と異なった考え方や価値観に触れる機会は少ないと言う。自身の見方の偏りには、バイアスがあるということにもなかなか気づけないため、授業では、「自分に確認バイアスがあることを認識する」「自分が理解していると思っていることが、実際には理解できていないかもしれないことを考える」「自分の意見に反対する人の視点を調べ、検討する」ことをテーマに議論し、確認バイアスに挑戦する具体的戦略を立てていく。

中学校では、アップスタンダーを育てるという学習も積極的に行なっている。これは、いじめやトラブルを発見した時、傍観者から行動者になろうという教育である。

例えば、SNS を利用することが日々の負担だと考えている女子中学生の事例について、どうすればいいか話し合った。あるグループの考えは、「SNS を休みたいのであれば距離をとればいい」「休めばいい」「ほかの人に相談すればいい」というものであった。しかし、「そのような行動を取ると陰口を言われる」「現実にはそのようには行動できない」という意見もあった。では、「利用を休むと悪口を言われる」という状況にどのように向き合い、解決すればいいのか。再度話し合った結果、生徒からは、「捉え方や価値観は人それぞれなのだから、色んな使いかたがあるということを知ることが大事なのではないか」という意見が述べられた。

自分の考え方や使い方が標準ではないと知り、多様な捉え方や価値観があるということを理解することは、彼らの行動に変化をもたらす。それは、授業者が教えるのではなく、彼ら自身が見つけ出すことができるよう、授業では議論を深めることを大切にしている。

6. デジタル・シティズンシップのメディアリテラシー

このように、メディアリテラシーは、デジタル・シティズンシップにおいて、「現実社会の諸課題と向き合う上で、どのようなメディアの特性をどのように理解するか、ソーシャルメディアにおけるメッセージやアルゴリズムの批判的読解と創造者としての子どもの責任という役割」を果たしている。

そして、デジタル・シティズンシップのメディアリテラシーは、「個人の感情と知識経験のバイアスが、メディアの理解をどのように形成するかを重視している」学習であると言える。

今後も、この視点を重視しながら、日本の学校で学びを深めていきたい。

-
- (1) International Society for Technology Education (ISTE) (2016年版)
<https://www.iste.org/standards/for-students> (参照日 2021.10.11)
 - (2) Common Sense Education (2020 更新)
<https://www.commonsense.org/education/> (参照日 2021.10.11)

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、074-076

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

ファクトチェッカーがMILフォーラムから学んだこと

古田大輔

ジャーナリスト/メディアコラボ代表

日韓のメディアリテラシーの研究者や実務家が集うフォーラムの中で、私は異色の存在でした。元々は朝日新聞の記者であり、その後、アメリカのインターネットメディア BuzzFeed の創刊編集長となり、さらに独立してジャーナリスト/メディアコンサルタントとして活動。現在は Google ニュースラボでティーチングフェローとして、デジタル報道の発展に取り組んでいる私がメディアリテラシーの世界に触れるようになったのは、ごく最近のことです。

そんな私が第2回韓日 MIL フォーラムに招待され、登壇したのは、私の経歴とメディアリテラシーの世界がごく自然に混じり合うようになったからです。その背景にあるのが、皆さんもよくご存じの「Information Disorder (情報の混乱)」。本稿では、他の寄稿者の方々のようなメディアリテラシーの専門家としてではなく、Information Disorder に対峙してきた立場から、日韓の現状やフォーラムを振り返りたいと思います。

メディアリテラシー研究者にとっては、メディアがいかに混乱の元となり、どのように理解し、対応するかは長年議論してきたテーマでしょう。しかし、報道業界が自分たちの問題として強く認識したのは、2016年のアメリカ大統領選が初めてだったと言っても過言ではありません。もちろん、それ以前にも流言飛語や低品質の記事を大量生産してインターネット上にばら撒く「Content farm (コンテンツ農場)」のような問題はいくつも存在しましたが、ニュースや報道の信頼性を根本から揺さぶり、社会を分断し、民主主義の根幹を脅かすような問題として世界的に注目を集めたのはあれが初めてでした。

2016年のアメリカ大統領選における情報の混乱に関する代表的な報道の一つが、当時、BuzzFeed の同僚記者だったクレイグ・シルバーマンによる一連の記事です。大統領選の終盤、Facebook 上で人気の記事を比較した報道は個人的にも衝撃的でした。The New York Times や The Washington Post、CNN などアメリカの代表的な報道機関による記事で人気だった上位 20 件の記事よりも、あまり知られていないような、偏った、不正確な記事を出すメディアやブログの記事上位 20 件の方が拡散していた、という内容でした。

2015年まで、世界中のニュースメディアは Facebook に夢中でした。世界中で成長を続ける

超巨大プラットフォームで自社のコンテンツが人気になれば、ユーザーが勝手に拡散してくれる。これまで自分たちだけでは届けられなかった新しい読者と出会い、リーチを広げる場所として活用することに多くのメディアが躍起になっていました。ところが、人は一般的に信頼性が高いと言われてきたメディアの情報よりも、自分が好む、自分の心情にあうコンテンツを猛烈にシェアしていた。それが明白になったのです。

ここから2つの施策の重要性が報道業界の中からも叫ばれるようになりました。一つがファクトチェック（情報の真偽検証）、もう一つがメディアリテラシー（またはニュースリテラシー）。私自身は前出のシルバーマンによる社内講習もあって、ファクトチェックに取り組むようになりました。

世界的にみると、2015年にいち早くアメリカのポインター研究所が International Fact-Checking Network (IFCN) を設置して、ファクトチェックに関する倫理規定を公表し、基準を満たす組織の認証を始めました。日本では特定NPO法人ファクトチェック・イニシアティブ(FIJ)が任意団体として発足したのが2017年。私も理事の一人ですが、新聞社やテレビ局などでファクトチェックを実践する動きがなかなか広がらず、IFCNの認証を受けている国内組織は2022年2月13日現在、ゼロです。アジアを含む世界で認証を受ける組織が増え、大手メディアでもファクトチェックの特設ページが設けられている状況と比べると、非常に遅れていると言わざるをえません。

一方で韓国は、少なくとも日本と比べると、ファクトチェックに関する取り組みが早かった国です。そのきっかけとなったと言われるのが2014年に旅客船が沈没し、修学旅行生ら304人が犠牲となったセウォル号事件。社会の注目を集める中で誤報が相次ぎ、メディアの信頼性が大きく低下しました。その危機感が情報の真偽検証の取り組みに繋がります。アメリカ大統領選に先立つ2016年4月には総選挙が実施され、ファクトチェックを実施するメディアが徐々に広がりました。2017年にソウル大(SNU)がSNUファクトチェックセンターを設置すると、大手の新聞やテレビも参画し、その資金はインターネットポータルNaverが拠出しました。FIJの活動に賛同する大手メディアが少ない日本とは対照的です。私はこれらの前提を踏まえた上で、メディアリテラシーの現状は日本と韓国でどう違うのだろうかという問題意識を持って韓日MILフォーラムに参加しました。

結論から言えば、メディアリテラシーを専門としていない者の目からは、ファクトチェックと同じく、メディアリテラシーに関しても、韓国の方が進んでいる部分もあるのでは、と感じさせるものがありました。

日本が一方的に劣っているという意味ではありません。フォーラムでは日本からの報告として、法政大学の坂本旬教授による「異文化対話とデジタル・シティズンシップのためのメディア情報リテラシー」と題した基調講演、そして、スマートニュースメディア研究所の山脇岳志研究主幹による「スマートニュースによる新たな試み：学校現場でクリティカルシンキングのスキルを伸ばす」と国際大学グローバル・コミュニケーション・センターの今度珠美客員研究員による「日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の実践と課題」の2つの発表がありました。それぞれ、世界で積み重ねられてきた知見がどのように日本の現場でデジタル・シティズンシップ教育とし

て実践されているのか、スマートニュースメディア研究所が個々の実践の取り組みを紹介する場として、また、教材を提供する場としてどのように新たな役割を果たそうとしているのか、充実した内容でした。

私が日本でも広げるべきだと注目した事例は、光州コミュニティ・メディアセンター講師のソン・ヒョンギさんの発表「ケアの対象からケアの主体へ」です。ソンさんは同センターで「メディア奉仕団 S」という 60～70 代の高齢者が中心となったボランティアサークルの活動を紹介しました。公務員だったソンさん自身がセンターで学んだ知識を活かしたいと定年後の 2008 年に設立。スマートフォンを活用した動画作成教育などに取り組んでいます。

ソンさんは「高齢者を対象にしたメディア教育は簡単ではない」と指摘します。パソコンやスマホへの習熟度は千差万別、「映像編集ツールの教育には相当な時間がかかる」と言います。「『休憩時間にお手洗いに行ったら、全て忘れてしまう』と冗談混じりに言う高齢者もいる」と紹介するほどです。

動画を撮影し、編集する手法を学んだ高齢者たちが、地域の映像記録を残すボランティアとして働く。若い世代が知らない地方の伝統や文化遺産についての深い知識は、映像記録に反映されます。ケアの対象だった高齢者が主体となって取り組む。メディアを活用し、発信する。取材や編集を経験することは、メディアからの情報の受け手としてのリテラシーも同時に高めます。「全員理解できるまで忍耐力を持って待ってあげる配慮をする」「目線を合わせる教育が最も大切」など、ソンさんの言葉は、メディアリテラシーやデジタル・シティズンシップを問わず、全ての教育に言える重要なポイントに満ちていました。

学校現場におけるメディアリテラシーやデジタル・シティズンシップ教育の普及は重要ですが、すでに学校を卒業した人たち、中高年層とどう繋がるかはそれ以上に難しい課題です。ファクトチェックは検証自体よりそれを必要とする人に届けることが難しいものですが、同じことがメディアリテラシーでも言えるのかもしれませんが。韓国のこのような取り組みは、非常に参考になりました。

最後に、フォーラムを通じて感じた日韓共通の課題に触れたいと思います。分野を越えた包括的な取り組みの重要性についてです。誤った情報 (Misinformation)、操作された情報 (Disinformation)、悪意ある情報 (Malinformation) が入り混じった情報の混乱に対して、メディアリテラシーやファクトチェックなど複合的な取り組みが求められています。研究者や教育者、ジャーナリストなどの壁を越えた横断的な協力が不可欠であり、今回、私が参加できたことを非常に喜ばしく思っています。スマートニュースメディア研究所から参加された山脇さんも朝日新聞時代の大先輩ですが、こういった越境が今後、ますます重要になってくるはずです。

私が現在所属する Google News Lab では毎年秋にアジア太平洋地域のファクトチェッカーが集う Trusted Media Summit というイベントを開いています。年々、メディアリテラシーに関する発表が増え、昨年秋には「報道の核にいかにもメディアリテラシーを取り入れていくか」が議論されました。私たちには国境や業界の枠を越えて共有すべき知見が溢れるほどある。改めてそう感じられるフォーラムでした。

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、077-080

特集 インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ
(第2回韓日メディア情報リテラシーフォーラム)

第2回韓日MILフォーラム 「インクルーシブなメディア教育とデジタル・シティズンシップ」 に参加して

登丸あすか
文京学院大学

1. シンポジウム参加に際して

本シンポジウムは2021年10月16日に韓国視聴者メディア財団の主催でオンライン上にて開催され、メディア教育、メディア・リテラシー、そしてデジタル・シティズンシップの重要性を韓国と日本間で確認し、双方の多様な実践例とその成果を共有するものであった。シンポジウムの構成は、第1部が韓国と日本の発表者による基調講演、第2部が韓国と日本におけるメディア・リテラシー教育の実践、第3部は第2部までの発表を踏まえたラウンドテーブルとなった。筆者はラウンドテーブルの討論者として参加したため、本稿では主に第2部以降の内容について報告する。

日本のメディア・リテラシー教育は、1970年代からの市民運動がベースとなり、1990年以降、複数の大学でメディア・リテラシーの科目が設置されるなど教育現場でも広がってきた経緯がある。筆者もまた1990年代後半に大学でメディア・リテラシーを学び始めたことが契機となり、この分野での研究を始めた。1990年代にはメディア・リテラシーの先進国として知られるカナダ、イギリスなどの理論や実践を取り入れる形で日本でも普及していったと言えるだろう。当時はテレビをはじめとするマス・メディアの時代であり、新聞、雑誌など紙媒体の分析、テレビや映画など映像メディアの分析が中心であった。そうしたマス・メディアの時代に発展したクリティカルな分析、その後のメディア制作の実践がデジタルメディアの時代に入りどのように転換してきたか、そして韓国での実践についても関心をもちつつシンポジウムに参加した。

2. 子どもが学ぶメディア・リテラシー

第2部で韓国からの発表は3つ、日本からの発表は2つあった。韓国による発表では、子

どもから高齢者まで幅広い年齢層におけるメディア・リテラシーの取り組みが紹介された。まず、親と小学生を対象とした教育実践例を報告した「デジタル・シティズンシップ教育としてのYouTubeの批判的読解」(キム・ヒョンジュ氏、パク・ハンナ氏、イ・ジヒョン氏、ユ・ギョンヘ氏、ソウル・コミュニティ・メディアセンター講師)を取り上げたい。これは、YouTubeのコンテンツをクリティカルに分析し、また学習者自身のコンテンツを制作し管理するといった内容であった。そのプロセスでは、Youtubeのプラットフォームに対する理解を深め、コンテンツの制作と管理、チャンネル運営に必要な基礎知識を身に付けられるよう構成されていた。

プラットフォームを理解するための事例として、メディアの倫理や規制に焦点が当てられていた。周知のとおりYouTubeはテレビやラジオの放送では見られないような多様なコンテンツを提供している。個人の趣味や好みによってコンテンツを選択できる利点がある一方、放送業界のような厳しい規制が働かないために、子どもにとって問題あるコンテンツを目にしてしまう可能性もある。また、メディアの商業的側面についても言及されていた。YouTubeはコンテンツをユーザーに提供するが、それはそのユーザーを広告主に販売するためでもある。したがって、ユーザーが少しでも長くYouTubeを視聴することを目的にアルゴリズムが開発された。こうしたYouTubeのプラットフォームに対する理解を基に、Youtubeを実生活で学習や余暇、進路、文化享受などに役立てる方法を考えるための教育プログラムが組まれていた。

日本からも子どもを対象とする教育実践例が紹介された。今度珠美氏(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員)による「日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の実践と課題」である。この報告ではまず、デジタル・シティズンシップとメディア・リテラシーの関連について説明があり、子ども向けの日本の教育実践例が紹介された。幼稚園の園児や小学校低学年向けの教育プログラムは、インターネットの有意義な点や可能性について確認した上で、オンライン上の危険を踏まえた使用上のルール、テクノロジーを使う際の気持ちを整理し確認するという内容であった。また、小学校高学年に対しては信頼性の高いニュースを探す。具体的には、注意深くニュースを読み、情報源を検討し、裏付けとなる情報を検索するといったものである。さらに中学生を対象とする場合には、フィルターバブル、エコーチェンバー、確認バイアスなどを取り上げるといふ。その理由として、中学生は自分が見たい情報だけを見る傾向がさらに強くなるという点が指摘されていた。こうした年齢層別教育プログラムについての発表から、年齢に応じた学びの重要性を再確認した。また、これらの教育プログラムでは子ども自身が考える時間を多く設定しており、子どもの主体性を重視する教育の必要性も提示されていたように思う。

時間の関係からシンポジウム内で今度氏に対して十分に質問できなかったが、子どものメディア教育については家庭での教育も重要であろう。現在文部科学省のGIGAスクール構想により、子どもは1人1台のタブレットを持ち自宅からオンラインで授業参加する機会もある。小学校低学年であれば、タブレットの設定や日々の使用に親のサポートが必要となる。しかし、あらゆる保護者がパソコンに長けているわけではなく、家庭環境にも差がある。子どもと親が共にメディアの学びを深めることが重要だと考えられるが、そのための環境、例えばネット環境の整備やパ

ソコンの所有などを整え、親に限らず子どもを支える大人の学びの機会やサポート体制を構築するなど課題が山積していると言えるだろう。

また、韓国からの報告「学校の内外のヘイトに対抗する」(ソン・ソンヨン氏、キム・サンウン氏、光州コミュニティ・メディアセンター講師)においては、アイデンティティや嫌悪表現が取り上げられていた。このテーマはヘイト・スピーチが度々問題になる日本においても重要な問題である。これは、オンラインメディアに登場する嫌悪表現を認識し、それに対抗できるためのプロジェクトであり、デジタル市民性の育成を目標としている。嫌悪表現の問題を検討するには、アイデンティティやマイノリティについての理解を深める必要があると指摘されていた。この教育プロジェクトでも学習者自身が考える時間を十分に取、「なぜ問題なのか」「どうして他者を傷つけてはいけないのか」といった問いを深められるよう考慮されていた。

3. 高齢者が学ぶメディア・リテラシー

そして、韓国からの発表「ケアの対象からケアの主体へ」(ソン・ヒョンギ氏、光州コミュニティ・メディアセンター講師)では、高齢者に対するメディア・リテラシー教育、映像制作の実践が紹介された。この教育プログラムに参加する高齢者のパソコンスキルは個人によって大きく差があり、苦手だとする高齢者には時間をかけて丁寧に指導を行うと報告された。必要に応じて少人数グループを編成して指導し、さらには1対1で対応することもあるという。またそのように丁寧に指導をしたとしても、習得には時間を要する。その点を理解した上で、高齢者の目線に合わせた教育が実践されていた。また、そうした困難を伴いながらも「映像を作りたい」という情熱を引き起こすことが肝要であるとの発言が印象的であった。

4. クリティカルの重要性

日本からのもう1つの発表は「スマートニュースによる新たな試み：学校現場でクリティカルシンキングのスキルを伸ばす」(山脇岳志氏、スマートニュース メディア研究所・研究主幹)である。ここでは、ニュースアプリであるスマートニュースの取り組みについて紹介され、ソーシャルメディアの影響が大きい社会において今後ますますクリティカルな思考が重要視されるだろうとの見解が提示された。

筆者自身、市民講座などでメディア・リテラシーについて説明する際、クリティカルという言葉の意味について質問を受けることが度々ある。クリティカルは、「批判的」という言葉で翻訳されるが、この言葉をネガティブなイメージで受け取る人も多い。メディア・リテラシーの重要な概念の1つでありながら、なかなか一般的には浸透しにくい側面がある。山脇氏からはクリティカルシンキングを「吟味思考」という言葉で説明してはどうかと提案がなされた。実際のメディア・リテラシー教育の現場では、クリティカルなメディア分析を行う際、批判するのではなく多様な視点からの分析を試みている。クリティカルという概念の理解が今後日本でどのように浸透

していくかに注視していきたい。

韓国および日本の発表、ラウンドテーブルでの議論を通じて、メディア教育を実践する人のメディア・リテラシーに対する理解が重要であり、またそうした学びを担うボランティアの育成と連携が必要だと痛感した。メディア・リテラシーのクリティカルな視点、マイノリティや多様性の尊重という概念を共有しつつ、メディア・リテラシーを実践する人たちの裾野を広げていくことが日本においても課題であると考えられる。

投稿・寄稿・報告

法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第3巻2号、082-088

サードプレイスとして地方図書館が果たす新たな役割 —岐阜市立図書館、まちライブラリーの取り組みを通して—

松本恭幸
武蔵大学

1. はじめに

近年、地方図書館は従来の貸出やレファレンス等の図書館サービスに加えて、地域の市民にとっての居場所（サードプレイス）としての機能を担うことが期待されるようになってきた。本稿では、こうした地方図書館に新たに求められるようになったサードプレイスとしての役割について、公共図書館として「街のリビングとしての機能」、「子どもたちを育む空間」、「市民とつくる図書館」、「人と街をつなぐ機能」を目指して先進的な取り組みを行っている岐阜市立図書館⁽¹⁾、及び市民が自発的に立ち上げる私設図書館（マイクロ・ライブラリー）として全国各地に展開しているまちライブラリー⁽²⁾の事例をもとに見ていきたい。

2. ぎふメディアコスモスにオープンした岐阜市立図書館

岐阜県岐阜市にある岐阜市立図書館は、2015年3月に旧本館が閉館し、同年7月に新たに誕生した複合文化施設「みんなの森 ぎふメディアコスモス」の2階にオープンした。新たにオープンした岐阜市立図書館は初代館長を公募し、岩手県葛巻町のNPO法人岩手子ども環境研究所の理事長だった吉成信夫が就任して5年間務めた。2020年度から吉成は「ぎふメディアコスモス」総合プロデューサーとなり、「知の拠点」である図書館を中核施設に、「絆の拠点」である市民活動交流センター、多文化交流プラザ、「文化の拠点」であるホール、展示ギャラリー、オープンテラスが集まった「ぎふメディアコスモス」全体を、地域の市民とどう繋ぐのかということに取り組んでいる。

吉成が岐阜市立図書館に赴任したのは2015年4月で、その時には建築家の伊東豊雄の設計した壁のない広場のような図書館の建物は既に完成しており、それを運営管理する上で吉成は、防音機能がない空間で従来の図書館サービスを踏襲したのでは上手くいかないと感じた。

そしてオープン前に吉成が考えたのが、岐阜市立図書館を滞在型図書館として運営管理するための理念となる、「子どもの声は未来の声」という言葉である。本を通じて子どもたちの豊かな未来へとつながる道を応援すべく、館内で子どもが少しざわざわしてもそれを微笑ましく見守る

という考え方をを持った図書館であることを前面に打ち出し、従来のオーソドックスな図書館サービスを求める利用者は、同じ市内にある岐阜県図書館の方に行ってもらい、県と市の図書館で棲み分けることを目指した。もちろんまったく放任ではなく、小さな子どもの父母には公共の場所でのマナーを教える場所であることについて注意を促し、みんなでお互い様の気持ちを持ち寄る場所にしていくことを目指した。

このような理念のもとに新たにオープンした岐阜市立図書館は、かつての旧本館時代は年間来館者が15万人程だったのが、開館して1年間で123万人の来館者を迎えることとなった。そして旧本館時代は貸出利用者の7割が40代以上だったのが、新たにオープンした後はそれが5割程度まで下がり、若い世代の利用者が増えた。

吉成は、「図書館スタッフが図書館サービスを通してつながる来館者の総和がその図書館の関係人口で、どれだけそうした来館者と豊かな関係性を築けるのかが、みんなの森であるぎふメディアコスモスの図書館事業の成功につながる」ということを図書館スタッフに伝え、そうした関係人口の拡大に取り組んで来た⁽³⁾。

3. 岐阜市立図書館の特徴

岐阜市立図書館では、本の貸出やレファレンスといった従来のサービス以外に、欧米の図書館のように、本や情報を通して他者との偶然の出会いや新たなコミュニケーションが生まれる街中のリビングルームのような場を目指しており、吉成はこれを「図書館は屋根の付いた公園である」と表現している。

リビングルームに最も近い機能を持ったスペースとして、0歳から2歳の子ども連れの親子が靴を脱いで寝っ転がって絵本に触れることの出来る「親子のグローブ」が設けられた。これはかつて吉成が、岩手県立児童館「いわて子どもの森」の初代館長だった際に、同様の絵本が読めるスペースを設けた経験をもとに考えた。子ども向けの読み聞かせは、「おはなしのへや」のような専門スペース以外に、こちらの場所やあるいはもう少し上の子どもを対象にした「児童のグローブ」でも行っている。読み聞かせの際に絵本を入れて運ぶ「わんこカート」と「にゃんこカート」が小さな子どもに大人気で、これを目当てに読み聞かせに来る子どももいて、岐阜市立図書館では、市内の小学校を巡回訪問する際のアウトリーチサービスの道具としても活用している。

そして小学校高学年から中学生の子どもたちにとって家庭、学校以外の居場所（サードプレイス）になることを目指し、子どもたちが家庭や学校ではなかなか身に付けるのが難しい「ユーモアと創造力をもとに自分で考え自分で伝えるチカラ」を身に付けるため、図書館という社会教育の場で「子ども司書養成講座」を行っている。さらにその卒業生を対象にメディア情報リテラシーを育むため、「ぎふメディアコスモス」を拠点にコミュニティFM局「FMわっち」の番組を制作する市民ラジオ局「てにておラジオ」の協力を得て、「子どもラジオ」の取り組みを行っている。

これはかつて吉成が理事長だったNPO法人岩手子ども環境研究所が運営する「森と風のがっこう」で「くるみラジオ」⁽⁴⁾というインターネットラジオに関り、その後、初代館長を務めた岩

手県一戸町の岩手県立児童館「いわて子どもの森」でミニFM局による「いわて子ども自由ラジオ」の放送を行っていた経験をもとに企画したものである。「子どもラジオ」にはこれまで100名以上の小中学生が参加し、市長をゲストに招いて子どもたちが話をうかがう番組も制作している。

こうした「子ども司書」や「子どもラジオ」以外でもう一つ子どもたちのサードプレイスとして重要な機能を担っているのが、中高生と司書を繋ぐ「心の叫びを聴け！YA交流掲示板」である。これはかつての「生協の白石さん」のように、司書が図書館利用者の中高生からの質問に掲示板で回答するというもので、恋愛・進学・友達関係等に関する様々な質問に、司書がユーモアを交えて回答する掲示板は大変な人気となった⁽⁵⁾。

また一般の市民にとっての居場所（サードプレイス）として、市民が自ら創る図書館を目指し、オープンに際して市民が本棚をつくる企画として「みんなのライブラリー おいてみま書架」のコーナーを設け、市民にお勧めの本を紹介する取り組みを行った。そして「市民が本と出会い、勧めあう場所」を目指し、本を媒介に自己語りや他者と対話する場としての市民が自発的に企画する読書会や本の交換会といった活動をサポートしてきた。また地元で地域づくり活動に取り組むNPO法人ORGANと協働で、「おとなの夜学」という岐阜の郷土文化について学ぶ講座を継続して行い、それを映像で記録してアーカイブして視聴出来るようにし、またブックレットにして販売している。

そして図書館の来館者と周辺地域を緩やかに繋ぐため、これまで子どもたちが本を読んで感じたことを他者と共有するために作った移動式のモバイル共読本棚を図書館の外のマルシェにも持ち出したり、来館者から寄せられた街の飲食店を始めとする様々な情報をもとに、「みんなのたからものMAP」を作成し、周辺地域を巡る情報ツールとして展示したりしている。また後で詳しく紹介するまちライブラリーという地域の寺や様々な店を運営する市民が自発的に立ち上げた私設のマイクロ・ライブラリーを、図書館の方で紹介して誘導することも行っている。

あと岐阜駅から「ぎふメディアコスモス」に向かう途中に柳ヶ瀬商店街があるが、岐阜市立図書館では中心市街地の活性化のため、柳ヶ瀬エリアの再開発に際してまちなか交流拠点に本棚を配置したり、柳ヶ瀬エリアの活性化を考える「やながせりノベーションスクール」で、柳ヶ瀬エリアと「ぎふメディアコスモス」を繋げるコンテンツの開発と展開を通して、柳ヶ瀬の文化・歴史をアップデートして未来につなげる取り組みに協力したりしている。

他にも図書館ではビジネス支援に力を入れており、岐阜県よろず支援拠点のコーディネーターに司書が同席して、ビジネス支援の相談を定期的に行っている⁽⁶⁾。ちなみに「ぎふメディアコスモス」の前の「みんなの広場 カオカオ広場」は、有料で移動販売を行うことが出来、こちらに移動販売車で店を出す際のアドバイス等も行っている。

4. 公共図書館として目指すサードプレイスの方向

岐阜市立図書館では、文化による社会的包摂を目指し、図書館の本のブックカバーフィルムを貼る作業の一部を、地元の就労支援施設に依頼する等、障がい者支援の取り組みを進めていこう

としている。

またこれから重視しているのは、岐阜市立図書館を活用して自発的に様々な市民活動に取り組む担い手を、どのように育てていくのかという点である。

岐阜市立図書館には現在、旧本館時代から続いている書架整理、資料整理、環境美化、館内案内、読み聞かせ等の図書館運営を手伝う図書館ボランティアと、新たにオープンしてから誕生した「本・ひと・まち」を繋げる活動を企画・運営するぎふライブラリークラブという2つのボランティア組織があり、さらにメディコスクラブという「ぎふメディアコスモス」全体の賑わいを創出するイベントの企画・運営に取り組むボランティア組織がある。ボランティア組織を分けたのは、何か新しいことを企画するのに比較的高齢者が多い以前からの図書館ボランティアと一緒にだと、新たに参加する若い人たちが提案しづらいといったことによる⁽⁷⁾。

こうした新たに誕生したボランティア組織を通して、市民が自発的に企画する読書会や本の交換会等の企画が生まれたが、開館から5年を経て吉成はさらに次のステージに向けて市民のシビックプライドの醸成を目指し、岐阜の郷土の文化や歴史について学んで地域の暮らしの魅力について知る事の出来る本を集めた、シビックプライドライブラリーのコーナーを館内に設けるとともに、2020年10月からシビックプライド連続講座をスタートさせた。さらに今後、図書館以外の機能が集まる「ぎふメディアコスモス」の1階のスペースを、シビックプライドプレイスとして地域文化を可視化する人や情報の集積拠点にしようとしている。すなわち従来の図書館の役割は地域の様々な資料を分類して保存することだったが、それを市民のシビックプライドの醸成に有効活用していこうとするものである。

そしてシビックプライドの醸成に向けて、市民が市民ジャーナリストとなって地域を取材して記事や映像で記録するため、2021年8月から「メディコス編集講座」をスタートさせた。この講座には若い世代の市民が多く参加しており、そこで学んだ編集のスキルを、「ぎふメディアコスモス」を拠点にした様々な地域づくり活動に活かしていくことが期待されている。

5. 全国に拡がるまちライブラリー

まちライブラリーは、一般財団法人森記念財団の磯井純充が2011年に提唱した本を通して人と出会う私設図書館を全国各地に拡げて行こうとする図書館活動で、2008年に大阪で磯井が自らの蔵書をもとに実家のビルで立ち上げた私設図書館「ISライブラリー」を、2011年10月にリニューアルオープンしたのが第1号である。

磯井はもともと森ビルで、社会人教育機関「アーク都市塾」、産学連携・会員制図書館「六本木アカデミーヒルズ」の立ち上げに携わっており、そうした中で地域の人々が集って交流したり学んだりすることの出来る図書館を街中につくることに関心を持ったが、森ビルの事業はあくまで自社ビルに付加価値を付けることが目的だったため、代わりに個人で実験的に取り組んだのが「ISライブラリー」だった。そして早稲田大学教授の友成真一を始めとする人たちと、まち塾@まちライブラリー実行委員会を結成して、学び合う機会と学び合う場を提供するまちライブラリーに

ついて検討し、そこに集まったメンバーの中から、最初に20カ所余りのまちライブラリーが誕生した。こうした小さな繋がりから始まり、その後、今日に至るまでの10年余りの間に、全国各地に900カ所以上のまちライブラリーのネットワークへと成長する。

まちライブラリーの運営母体は、一般社団法人まちライブラリーが運営委託されているところが全国に10数カ所あり、50名程のスタッフで運営しているが、それ以外は個人が立ち上げたものからNPOや企業が立ち上げたものまで様々である。磯井は最初、新たにまちライブラリーを立ち上げたいという人を個人でサポートしていたが、2013年4月に大阪府立大学が地域連携に向けた社会実験として、大阪市内のサテライトキャンパスに「まちライブラリー@大阪府立大学」を設置することになり、その運営委託先として一般社団法人まちライブラリーを立ち上げることになった。その後はこちらのスタッフが、まちライブラリー全体の広報と併せて、新たに参加したまちライブラリーの集客に向けて個別にサイトで紹介したり、本の管理等の運営について必要なアドバイスを行ったりしている。また2013年8月には一般社団法人まちライブラリーが中心となり、全国各地の小さな図書館活動をしている人たちが集まるマイクロ・ライブラリーサミットを開催した。

まちライブラリーは他にも公共図書館の一角に誕生したまちライブラリー、小学校の学級文庫として子供達が持ち寄った本をもとに誕生したまちライブラリー、サービス付き高齢者向け住宅の中に誕生したまちライブラリー、「巣箱」と呼ばれる家の前に置かれた箱に本が並んだまちライブラリー、さらには早稲田大学の学生がカバンに本を詰めて大学に持って行って行う移動式のまちライブラリーまで、様々な形のものが存在する。各まちライブラリーの運営の仕方は全てオーナーに任されており、参入障壁が低いいため、オーナーも小学生から80代まで幅広い層に及んでいる。

まちライブラリーの規模も様々で、第1号となった「ISまちライブラリー」の蔵書数が約8000冊、比較的規模の大きい大阪の「まちライブラリー@もりのみやキューズモール」の蔵書数が約1万5000冊だが、一方で個人が運営する小規模なところは、数十冊規模のものもある。

地域の市民にとっての居場所（サードプレイス）であるまちライブラリーでは、本は人と人を繋ぐ媒介物という位置づけである。多くのまちライブラリーでは、図書館が行っているようなレファレンス等のサービスを行っておらず、本を体系的に収集することもなく、オーナーを始めとするスタッフは、本のある場所を提供する世話人という位置づけで、司書の資格を持っている人も少ない。ただまちライブラリーでは、オンライン蔵書管理システムを提供するリブライズと共同で開発した「コミュニティ型図書館システム」を、比較的規模の大きいところでは使って、会員登録や貸出の管理等をしている。「巣箱」を始めとした個人が運営する小規模なまちライブラリーでは、本を借りる人が置いてあるノートに自分で記入する形式のところもある。

6. サードプレイスとしての公共図書館とまちライブラリー

岐阜市立図書館の例をもとに見てきたように、今日、多くの地方図書館では従来の図書館サー

ビスに加えて地域づくりの拠点となる地域の市民にとっての居場所（サードプレイス）を目指しているが、ただ組織の様々な制約があって、岐阜市立図書館のような先進的な取り組みがどこでも自由に出来るわけではない。岐阜市立図書館では市民の読書会を始めとする自立した多様な学びの場が自然発生的に生まれ、図書館側ではそれをサポートすることに徹し、またまちライブラリーでも、個々の多様なまちライブラリーを立ち上げたいという取り組みを、一般社団法人まちライブラリーではサポートすることに徹している。だがアメリカの地方図書館のように自治体から独立した行政委員会である図書館委員会のもとで運営されるのと異なり、ある意味で自治体との繋がりの強い教育委員会が所管する日本の地方図書館では、地域の市民にとっての居場所づくりにおいても、市民の自発的な多様な取り組みが優先させるわけでは必ずしもない。

今日、全国各地に市民に開かれた場を提唱した大型の公共図書館が各地で誕生しているが、かつて不動産ビジネスの現場にいた磯井は、「今後、少子高齢化が進む中で大型の公共図書館とその仕組みを多くの自治体が継続して維持することが出来るのかどうかという問題があり、将来的にその機能を著しく低下させることになるなら、むしろ遥かにコストがかからないまちライブラリーのような社会インフラを自治体は支援するとともに、逆に多くの公共図書館ではまちライブラリーでは難しい様々な地域資料のアーカイブのようなことに、もっと予算をかけるべきではないか」と考える⁽⁸⁾。

あとこれまで全国各地に900カ所以上誕生したまちライブラリーの内、これまでその10数パーセントが活動を終了しているが、磯井はサードプレイスとして個々のまちライブラリーが継続するための重要なポイントとして、「まちライブラリーは地域社会への参画の1つの方法だが、ここでは課題の解決とかを目指すよりも、ある意味で遊びの道具として運営の面白さを楽しむことが長続きして重要」と指摘する。これは個人が運営するまちライブラリーに限らず、企業が運営するまちライブラリーも同様に、マーケティング等の具体的な成果を追求するものではなく、社会貢献の一環として地域に末永く関わるために参加を希望する企業に対してのみ登録を認めている。

7. おわりに

地域の市民にとっての居場所（サードプレイス）としての公共図書館を目指して、岐阜市立図書館は「屋根の付いた公園」として、本を媒介して子どもを繋ぎ、中高生を繋ぎ、市民を繋ぎ、そして市民と地域を繋ぐ様々な取り組みをこれまで行ってきた。そしてその延長にこれからの方向としてあるのが、市民のシビックプライドの醸成による「ぎふメディアコスモス」を核にした多くの市民の地域づくりへの参画と地域の活性化である。

ただ岐阜市立図書館の極めて先進的な取り組みは、図書館長、そして総合プロデューサーとしてこれまで6年余り運営に関わって来た吉成の属人的な発想によるところが大きく、他の多くの公共図書館で同様の取り組みを行うことは、様々な組織のしがらみもあって簡単ではないだろう。また将来的に多少とも懸念されるのは、吉成の在職中にシビックプライドの醸成による新た

な図書館活動と地域づくりの担い手となる市民が十分に育って、吉成が「ぎふメディアコスモス」を離れた後も、行政と協働で「ぎふメディアコスモス」を核にした市民の地域づくりへの参画と地域の活性化が継続するかどうかという点である。

一方、まちライブラリーの方は、提唱者の磯井の手を離れて、自発的な市民の手により全国各地に広がる仕組みが誕生しているが、ただ個人による運営が中心のまちライブラリーが図書館として担うことの出来る役割は限られており、地域の記録と記憶のアーカイブとシビックプライドの醸成に向けたその活用という点では、岐阜市立図書館のような先進的な取り組みを行う公共図書館にかなりの部分を委ねることになろう。

今後、全国各地の多くの公共図書館とまちライブラリーが、それぞれ異なる方向から必要に応じて協力し、地域の市民にとっての居場所（サードプレイス）となっていくことを期待したい。

-
- (1) 2021年8月6日に行ったみんなの森 ぎふメディアコスモス総合プロデューサーの吉成信夫、みんなの森 ぎふメディアコスモス館長兼岐阜市立図書館館長の川合裕子、岐阜市市民協働推進部ぎふメディアコスモス事業課企画係の今尾武嗣へのヒアリングをもとにまとめた。
 - (2) 2021年2月1日に行ったまちライブラリー提唱者の磯井純充へのヒアリングをもとにまとめた。
 - (3) 岐阜市立図書館の特徴的な取り組みの多くは、吉成が赴任してから開館するまでの3カ月間に、図書館スタッフ全員と行ったワークショップでの対話を通して生まれたアイデアをもとに企画された。
 - (4) 青森県八戸市のコミュニティFM局「BeFM」で放送を行っていた環境保護団体「PEACELAND」代表の山内雅一が、「森と風のがっこう」、宮城県仙台市のアトリエ「wasanbon」、山形県天童市で太陽電池パネルの販売を手掛ける「ソーラーワールド」等と協力して、4県のメンバーが合同でそれぞれの地を巡りながら番組を制作し、ネットで配信する市民ラジオ活動である。
 - (5) 「YA 交流掲示板」では何か正しい答えを出すのではなく、投稿者の「心の叫び」を受け止めることを重視している。
 - (6) ビジネス支援の相談以外にも、主にこれから起業する人たちを対象に、起業する際のSNSの活用の仕方やPOPの作成の仕方についてレクチャーしたり、金融機関の人に起業のノウハウについて語ってもらったりする図書館ビジネス支援セミナーを行っている。
 - (7) 岐阜市立図書館では、自発的な市民の活動について、図書館サイドとの連携や組織化して役割分担すること等は（関わっている多くの市民にとって自分事ではなく他人事になってしまう可能性があるため）安易に勧めず、機が熟して相談された場合にイコールパートナーとして対応するようにしている。また図書館協議会のメンバーについても、単に意見を述べるだけでなくボランティアで図書館活動に積極的に関わっていかうとする人に依頼し、図書館協議会のメンバーと図書館活動に関わる市民とでコミュニケーションをとっている。
 - (8) 自治体が立ち上げたまちライブラリーとしては、2019年9月に開館した東大阪市文化創造館で、公共施設のコンサートホールの中にコミュニティスペースとして「まちライブラリー@東大阪市文化創造館」が作られたケース等があるが、まだその数は少ない。

『メディア情報リテラシー研究』原稿募集

【提出期限】

投稿原稿は随時募集する。最新号発刊1ヶ月前以降に届いた分は、次々号への投稿の扱いとすることがある。なお、本ジャーナルは、原則として10月(第1号)と4月(第2号)に発行する。

【投稿区分について】

研究論文、研究ノート、報告、評論、資料、書評、その他

【原稿作成】

原稿作成にあたっては下記の「投稿規定」と「執筆要綱」を参照すること。

【提出先】

sakamoto.hosei@gmail.com

【掲載先】

本ジャーナルは、PDF形式にて法政大学図書館司書課程及びAMILECのサイトにオープン・アクセス・ジャーナルとして公開されるとともに、法政大学機関リポジトリを通して、CiNiiに公開される。

【投稿規定】

本ジャーナルへの投稿については以下の規定を満たさなければならない。

<投稿者要件>

1. メディア情報リテラシー(Media and Information Literacy)研究もしくは実践に携わるもの。

<原稿要件>

2. 投稿原稿は、メディア情報リテラシー研究や実践に貢献するものであり、他の刊行物に未発表の原稿であるとともに、法政大学機関リポジトリに登録することを承認するものとする。

<投稿区分>

3. 投稿の区分は、学術論文(研究論文、研究ノート)、報告、資料、書評、その他とし、投稿時に明記すること。

- (1) 研究論文は、理論的または実証的な独創性のある研究、および独創的または有効性のある教育実践研究、教材・教具・教育システム等の開発研究とし、論文として完結した体裁を整えていること。
- (2) 研究ノートは、新しい事実の発見、萌芽的研究課題の定義、少数事例の揭示など、将来の

研究の基礎または中間報告として、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているものとする。

- (3) 報告は、教育実践、国内外の動向、施策の状況が記述されたもの。
- (4) 資料は、メディア情報リテラシーに関する情報提供。
- (5) 書評は、メディア情報リテラシーに関する図書の紹介や批評とする。
- (6) その他、発行者は区分を適宜設けることができる。

<採否>

4. 投稿原稿は、原則として発行者が採否を決定する。

<文字数>

5. 投稿原稿は、原則として学術論文およそ 40,000 字以内、報告・資料等 20,000 字以内、書評 4000 字以内とする。

<執筆上の留意点>

6. 原稿執筆については、学問領域ごとの執筆様式に準じる。
7. 著者校正は初校のみとし、再校以降は編集者の責任において行う。なお、著者校正の際に、大幅な修正は認めない。
8. 掲載された原稿をインターネット上に公開する権利は法政大学に属する。
9. 投稿された原稿は、原則として返却しない。
10. 以上の投稿規程について遵守または同意のない原稿については、掲載手続きには入らない。
11. 編集の都合上、発行者および編集者から修正を要望することがある。

【執筆要綱】

原稿執筆については、以下のとおりとする。

- (1) 表題及び本文の使用言語は、原則として日本語とする。
- (2) すべての投稿原稿には、表題、著者名、所属を、加えて学術論文には本文の要約（日本語）を 400 字以内で本文の前に追加する。
- (3) 学術論文には、上記(2)の他に、英文の「タイトル」「名前・所属」「キーワード（5 語以内、アルファベット順）」「英文要旨（300 語 words 内）」を作成する。（学術論文ではない場合は、英文要旨は原則として自由）
- (4) 原稿はすべて A4 判で横書きとする。また、写真、図表は原稿に挿入するとともに、元データを別添付すること。
- (5) 典拠の書き方は筆者の所属する分野に合わせるものとする。
- (6) 文字数や余白の設定は以下のように設定をすること。
 - 本文の書体 MS 明朝 10.5 ポイント
 - 論文タイトル○○○（MS ゴシック・太字・14p）
 - 名前○○○（所属○○○）（MS 明朝・太字・12p）
 - 1. 章タイトル○○○（MS ゴシック・太字・10.5p 太字：数字は全角）

「章」と「章」、「章」と「節」の間は1行アケル。

- 1ページの文字設定を「40字×36行の1段組」（1枚・1,440字）とし、原則として
論文28ページ（40,320字）以内
報告・評論・資料等12ページ（20,160字）以内
書評3ページ（4,320字）以内
とすること。
- Word等で作成すること。
- 余白の設定は「上35mm、下左右30mm」とすること。
- 本文の書体は「MS明朝10.5ポイント」、「英数字Times New Roman 10.5ポイント」
とすること。

メディア情報リテラシー研究
第3巻第2号 2022年3月

編集責任者：坂本 旬

発行：法政大学図書館司書課程

〒102-8160

東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学ボアソナード・タワー14階

資格課程実習準備室

Tel：03-3264-4360